

こざわ 2 おおうえ 小沢Ⅱ大上遺跡

—市内遺跡発掘調査報告書2—



小沢Ⅱ大上遺跡

2002.8

岩手県宮古市教育委員会

麦生野

こ ぎわ 2 おお うえ
小沢Ⅱ大上遺跡

— 市内遺跡発掘調査報告書 2 —



遺跡遠景航空写真（南東から）

Photo. 1

2002. 8

岩手県宮古市教育委員会

序

海と山の幸に恵まれた三陸地方の沿岸部には、数多くの遺跡が所在しており、私たちの住む宮古市にも、先人たちが残した貝塚、館跡、そして集落跡など469ヶ所もの遺跡があることが知られています。

これらの遺跡は、数千年前の縄文時代から中世、さらに近世までの長きにわたる宮古の歴史を、現代の我々に語り伝えてくれる貴重な財産であります。私達はこれらの遺跡を、正しい認識とともに、後世に伝え残していく責務があると考えております。

本書は、個人住宅の建築工事に伴う小沢Ⅱ大上遺跡の発掘調査の結果をまとめたものであります。

報告書として刊行することにより、この遺跡の調査記録が、地域史の資料として活用されることを望むとともに、埋蔵文化財への理解がなお一層深まることを願うものです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および本書の刊行にあたり、ご協力、ご支援を賜りました関係者の皆様に対し心から感謝を申し上げ、本書の序文といたします。

平成14年8月

宮古市教育委員会
教育長 中屋定基

例 言

1. 本書は、宮古市小沢地区に所在する小沢Ⅱ大上遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は、概説編と本編から成る。概説編では調査の概要を解説し、本編は、調査内容の詳細を報告したものである。
3. この調査は、個人住宅の建築工事に伴う事前調査であり、平成10年度の市内遺跡発掘調査事業として実施されたものである。
4. 調査主体は宮古市教育委員会であり、発掘調査および報告書の作成は、社会教育課の竹下が担当し、その他担当職員がこれを補佐した。
5. 地形図及び遺構図版の方位は磁北を表し、レベル数値は標高値を示したものである。
6. 土層の観察、表記にあたっては、『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄編著 1990年度版）を使用した。
7. 出土遺物、発掘調査資料は宮古市教育委員会で保管している。

目次

序 例言 目次

I 概説編	1
はじめに	”
1 調査のあらまし	”
2 調査の経過	2
3 遺物包含層	3
4 包含層の遺物	4
5 閉伊街道と黒森道	”
II 本編	5
1 序章	”
(1) 調査に至る経過	”
(2) 調査の経過	”
(3) 調査体制	6
2 立地と環境	7
(1) 遺跡の位置と立地	”
(2) 周辺の遺跡	8
3 調査内容	9
(1) 調査地区	”
(2) 基本層序	10
(3) 遺構の検出状況	12
(4) 遺物包含層	13
(5) 包含層の遺物	23
(6) 畝跡	28
(7) 土坑	29
(8) 柱穴	30
4 まとめ	32
(1) 遺物包含層	”
(2) 畝跡	36
(3) 土坑	”
(4) 柱穴	”
(5) 総括と付記	37
参考文献	”
報告書抄録	39

挿 図 目 次

Fig. 1 遺跡の位置と周辺遺跡分布図	7
Fig. 2 地形分類と遺跡分布図(1:50,000)	8
Fig. 3 調査地区と周辺地形(1:5,000)	9
Fig. 4 調査地区地形図(1:500)	10
Fig. 5 基本土層図(1:30)	10
Fig. 6 調査区全体図(1:100)	13
Fig. 7 遺物包含層土層断面図(Section N-S)	15
Fig. 8 遺物包含層土層断面図(Section E-W)	16
Fig. 9 NW区IV層平面検出状況	19
Fig.10 I,II,III層出土遺物	24
Fig.11 III,IV,V,VIIa層出土遺物	26
Fig.12 XK01,02,03土坑平面図・土層断面図	30
Fig.13 S E区柱穴平面図	30
Fig.14 層位関係図-1(遺物包含層)	33
Fig.15 層位関係図-2(IV-3~IV-21層)	34
Tab. 1 包含層出土遺物の種別一覧表	32

写 真 目 次

Photo.1 遺跡遠景航空写真(南東から)	内表紙
Photo.2 発掘調査をした場所(西から)	1
Photo.3 発掘調査の様子(南から)	1
Photo.4 発掘調査前の様子(南東から)	2
Photo.5 表土を取り除いた状態	2
Photo.6 真砂土を取り除いた状態	2
Photo.7 さらに掘り下げた状態	2
Photo.8 部分的に掘り下げた状態	3
Photo.9 堆積した土の断面	3
Photo.10 第4層の堆積状況	3
Photo.11 最も深く掘った部分	3
Photo.12 第1層から出土した遺物	4
Photo.13 1857年(安政4)の絵図(盛岡市中央公民館所蔵)	4
Photo.14 1933年(昭和8)撮影の航空写真	4
Photo.15 遺跡遠景(南西→)	6
Photo.16 遺跡周辺垂直写真(昭和54年撮影)	11
Photo.17 調査前の状況(北西→)	11
Photo.18 基本土層(北端部)	11
Photo.19 基本土層(南半部)	11
Photo.20 遺物包含層土層断面(Section N-M)	17
Photo.21 遺物包含層土層断面(Section M-S)	17
Photo.22 遺物包含層土層断面(Section M-S北端部)	17
Photo.23 遺物包含層土層断面(Section W1-E1東半)	18
Photo.24 遺物包含層土層断面(Section W1-E1西半)	18
Photo.25 遺物包含層土層断面(Section W1-E1中央)	18
Photo.26 NW区IV層平面検出状況(南→)	20
Photo.27 NW区IV層平面検出状況(南東→)	20
Photo.28 NW区IV層平面検出状況(北→)	20
Photo.29 II層出土遺物	25
Photo.30 III層出土遺物	25
Photo.31 III層出土遺物	25
Photo.32 IV層出土遺物	27
Photo.33 V層出土遺物	27
Photo.34 VI, VIIa層, VIIa層出土遺物	27
Photo.35 第1~3号土坑検出状況(南東→)	31
Photo.36 第1~3号土坑埋土断面(南東→)	31
Photo.37 第1~3号土坑完掘状況(南東→)	31
Photo.38 三閉伊路程記[幕末](盛岡市中央公民館所蔵)	38
Photo.39 遺跡周辺垂直写真(昭和34年撮影)	38

I 概説編

はじめに

小沢Ⅱ大上遺跡おざわⅡおおうえの発掘調査は、遺跡内で住宅の建築工事が行われることになったため、工事に先立ち緊急に行われたものです。工事によって住宅が建つ部分の遺跡が失われてしまうことから、そこにどのようなものが残されていたかを発掘し、内容を確認して記録することが行われました。

この報告書は発掘調査の結果をまとめたもので、「概説編」では調査のあらましなどについて解説しています。また「本編」では、調査で記録された資料や出土した遺物について、さらに詳しく報告しています。

1 調査のあらまし

発掘が行われた場所は宮古小学校のグラウンドに近い山すその畑で、西向きの緩やかな斜面になっています。この畑には、平安時代の土器は(土師器)や縄文時代の石器などが分布しており、以前から遺跡であることが知られていました。

調査した場所は、この遺跡の中で最も南の部分にあたり、遺跡は調査地区から北側の山すそに広がっています。(→本編9ページ Fig.3)

調査ではまず始めに、発掘する範囲を決めて表土を取り除きます。そして少しずつ土を掘り下げながら、土の色や硬さの変化を観察していきます。

このようにして調査を行った結果、ここには遺物を含んだ土の堆積層たいせきそう いぶつほうがんそう(遺物包含層)が、地表から2m以上の深さまで続いていることが確認されました。(→本編15ページ Fig.7,8)

堆積層に含まれる遺物の量はさほど多くはありませんが、陶器や磁器、文久永寶や寛永通寶、鉄製品や鉄滓てつせいひん てっさい かなくそ(金糞)、土師器や須恵器、石鏃すえき せきぞく(石の矢尻)などの遺物が出土しました。これらの遺物は、縄文時代、奈良・平安時代こだい(古代)、江戸時代きんせい(近世)などのもので、特に土師器、鉄滓、鉄製品など古代以降の遺物が多く見られました。(→本編24ページ Fig.10,11)



発掘調査をした場所(西から) Photo. 2



発掘調査の様子(南から) Photo. 3

2 調査の経過

ここでは、調査の進行状況について順を追って説明します。

調査は、平成10年の4月から5月にかけて行われました。調査地区はグラウンド脇の道路に面した畑で、標高は7mほどあります。
(→本編10ページ Fig.4)



発掘調査前の様子(南東から) Photo. 4



表土を取り除いた状態 Photo. 5

地表の土(畑の耕作土)を取り除くと、黄色い土(真砂土)と暗褐色の土が見えてきました。黄色と暗褐色の土が、交互に縞のように現れている部分もあります。

十文字の部分、土の堆積状態を記録するために残したセクションベルトです。

黄色い真砂土の部分だけを掘り下げていくと、規則的な凹凸が筋状に並んでいる状態が発掘されました。

これは昔の畑の畝(うね)が、真砂土によって埋もれ、そのままの形で残っていたものです。
(→本編28ページ畝跡)



真砂土を取り除いた状態 Photo. 6



さらに掘り下げた状態 Photo. 7

昔の畑の跡を掘り下げていくと、遺物を含んだ黒褐色の土が、さらに深く堆積していることがわかりました。

また、柱を立てた穴の跡(柱穴)や、浅く掘り込んだ穴も発掘されました。
(→本編23ページ 包含層の遺物、柱穴、土坑)

3 遺物包含層 (→本編13ページ)

遺物を含んだ黒褐色の土は、少しずつ積み重なって、厚い堆積層になっていました。

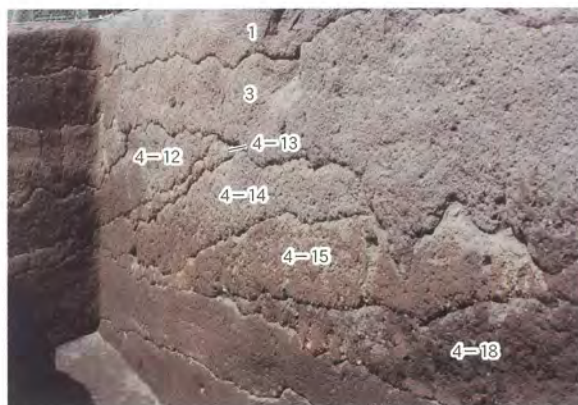
右の写真は、土の堆積の状態を調べるために、黒褐色土の一部を深く掘り下げたところです。

この堆積層の断面には、現在の畑の耕作土(第1層)、黄色い真砂土(第2層)、昔の畑の畝(第3層上面)、その下に黒褐色の土などが見られます。右の写真の様に、畑の畝の断面がはっきりと観察されます。

第3層から下は、土の色や性質などによって、第4～第8層までに分けられました。

最も深く掘った部分は、地表から2.5mあり、深さ約2mの第8層上面からは鉄滓が出土しました。

第4層は、4-1層から4-21層に分けられ、黒褐色や黄色の土が斜めに重なって堆積しています。他の層とは様子が違ってきます。



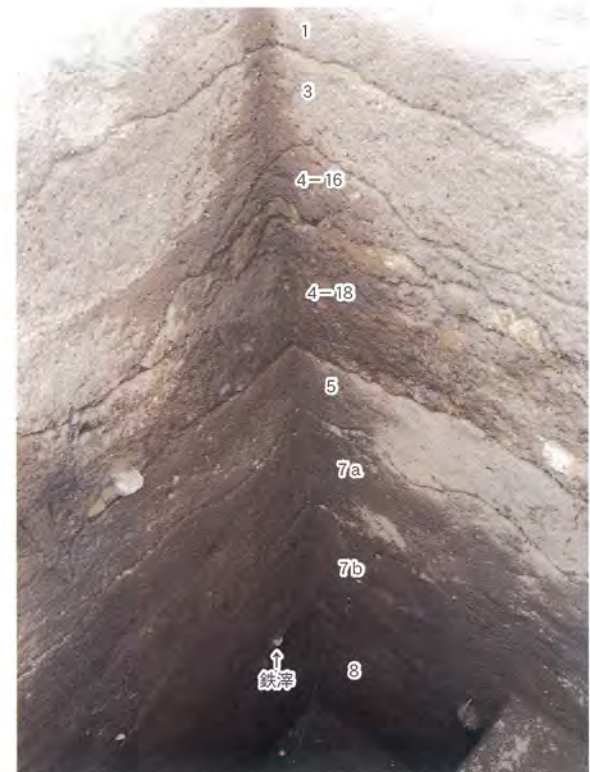
第4層の堆積状況 Photo.10



部分的に掘り下げた状態 Photo. 8



堆積した土の断面 Photo. 9



最も深く掘った部分 Photo.11

4 包含層の遺物

(→本編23ページ)

右の写真は、現在の畑の耕作土(第1層)から出土した遺物です。

土師器の甕の底や口の部分、鉄の角釘、縄文時代の石鏃などがあります。

このほかに、鉄滓も多く見られ、全ての層から出土しています。



第1層から出土した遺物 (S=1/2)

Photo.12

5 閉伊街道と黒森道 (→本編37ページ)

この遺跡では、古代以降の時期から近世や現代に至るまでの時の経過を、厚く堆積した遺物包含層の中に読み取ることができます。

この絵図は、江戸時代の末期に描かれた『御領分海陸分間図』の一部です。今から、145年前の宮古の様子がよくわかります。向町から横町を^{むかえまち}通って盛岡に向かう道が閉伊街道です。



1857年(安政4)の絵図
(盛岡市中央公民館所蔵)

Photo.13

右の写真は、今から69年前に撮影されたもので、ほぼ中央に宮古尋常高等小学校(現在の宮古小学校)が写っています。

絵図と写真を見比べてみると、調査地区の近くを黒森神社に向かう黒森道が通っていることがわかります。

この道を人々が行き交っていた時代の出来事も、この遺跡の中に埋もれているのです。



1933年(昭和8)撮影の航空写真

Photo.14

Ⅱ 本 編

1 序 章

(1) 調査に至る経過

この調査は宮古市小沢1丁目101番2号における、個人住宅の建築工事に伴い実施されたものである。住宅建築の計画については、工事主体者から宮古市教育委員会に提出された「埋蔵文化財の有無及びその取扱いについて」の照会文書によって、施工範囲等の詳細を知ることとなった。建築予定地は、背後の山地から低地に至る緩斜面に位置する畑地で、埋蔵文化財包蔵地「小沢Ⅱ大上遺跡」内にあり、現地踏査によって土師器と縄文時代の石器が分布していることが確認された。

宮古市教育委員会では現地踏査の結果に基づき、平成10年3月11日付け教第1584号の回答文書で、照会の土地は埋蔵文化財包蔵地であり、工事の事前に協議されたい旨を伝えた。工事主体者とその取扱いについて協議を行った結果、居宅の老朽化、建築資金の融資等の関係により緊急に事前調査を実施する必要があると判断された。工事主体者は埋蔵文化財包蔵地「小沢Ⅱ大上遺跡」に係わる工事について、文化財保護法第57条の2の規定による届出書を提出し、これに対し岩手県教育委員会からは「工事着手前に発掘調査を実施すること」の旨の指導が通知された。

調査の実施にあたり、日程調整と調査費について検討することとなり、内部協議及び県教育委員会との協議の結果、調査は4月から着手することとし、平成10年度の市内遺跡発掘調査事業としてこれを実施することとなった。

(2) 調査の経過

発掘調査は、住宅建築部分の193.75㎡を対象に平成10年4月8日から開始された。対象地区は12.5m×15.5mの南北に長い矩形の範囲で、調査区は対象地区をNE、NW、SE、SW区の小区画に四分割し、区画断面を土層堆積状況の観察面とした。また、平面図の記録は用地範囲を示す東側の長辺及び北東角の杭を基準とする任意座標を設定して行った。

遺物の分布状況からは古代ないし縄文時代の遺構が存在する可能性が考えられたが、表土を除去した段階で検出された遺構は、黄褐色の砂質土に覆われた畑の畝跡であった。この畝跡は覆土の出土遺物から近來のものと考えられたため、これを除去しさらに下位の面で遺構検出作業を行うこととした。旧耕作土である畝跡を除去した面では、調査区北側のNE区で土坑が検出され、またNW区北半では黄褐色土と黒褐色土が不規則に混入する土層の堆積が確認された。またSE区南半では、不明確ではあるが土色の漸移的な変化が見られた。旧耕作土の下面では、これらの土坑の他には明確な遺構は検出されず、土坑の精査とさらに下位の層について調査を進めることとなった。

調査区の北側と中央に幅1mのトレンチを設定し、調査区内の土層堆積状況を確認しながら、下位の遺構検出作業を行った。またSE区では、土色が漸移的に変化していた南半部について堆積土を掘り下げ遺構の有無を調査した。その結果、設定したトレンチ内では遺構は確認されず、SE区の南西部で柱穴が検出された。NW区の土層断面では黄褐色土と黒褐色土が互層を成す層があり、その下位に少量の遺物を含む黒褐色土の堆積が見られた。最深部では地表から2.5mまで掘り下げ土層の観察を行ったが、検土杖の探査ではさらに1m程の深さまで同様の黒褐色土が堆積していることがわかり、基盤土の確認は断念せざるを得なかった。

調査前に予想されていた古代ないし縄文時代の遺構は存在せず、99.16㎡の調査面積で畝跡、土坑、柱穴及び遺物包含層が確認される結果となり、調査区周辺の地形測量及び調査区平面図、土層断面図の作成、堆積土層の層位関係の観察、注記等を行い調査を終了した。

(3) 調査体制(平成10年度)

調査主体	宮古市教育委員会	教育長	中屋定基
調査総括	中洞惣一	宮古市教育委員会社会教育課長	
事務担当	瀬川康平	〃	社会教育課長補佐兼文化係長
	野崎政博	〃	社会教育課社会教育係長
調査員	竹下将男	〃	社会教育課主任(調査、報告書担当)
	高橋憲太郎	〃	社会教育課主任(調査)
	鎌田祐二	〃	社会教育課主任
	加納由美	〃	社会教育課主事(調査)
	阿部 豊	〃	社会教育課埋蔵文化財調査員
	工藤剛司	〃	社会教育課埋蔵文化財調査員
発掘調査作業員	北村忠次	佐々木茂實	中嶋正裕 福士祐二 前川友宏
資料整理作業員	中嶋正裕	平山早予子	福士祐二 前川友宏

なお、発掘調査にあたり、地権者の小成能章様、建築施主の小成敏之様から多大なるご協力を賜りました。記して心より謝意を表します。



遺跡遠景(南西→)

Photo.15

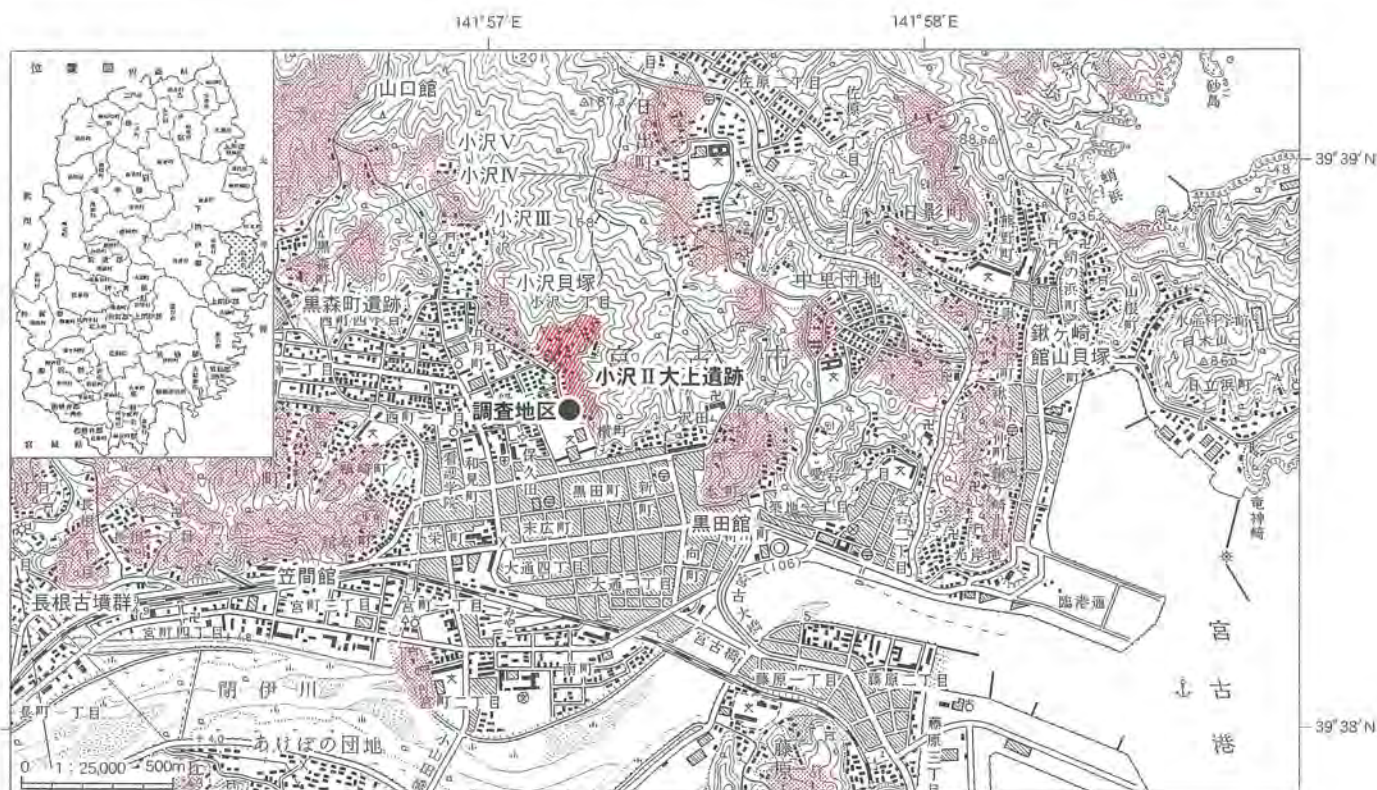
2 立地と環境

(1) 遺跡の位置と立地

宮古市は陸中海岸のほぼ中央部にあり、岩手県の東端に位置する。市域は総面積339km²で、南北、東西それぞれ約20kmの不整四角形を成し、北東部には宮古湾が深く入り込んでいる。東西は、本州の最東端である鮭ヶ崎(東経142°04′)から、南西部の長沢牧場(東経141°45′)に至り、新里村と境を接する。南北は山田町に続く川代地区(北緯39°29′)から、北の亀ヶ森(北緯39°43′)に至る範囲で、田老町、岩泉町と隣接する。

市内の地形は多くの部分が丘陵・山地で占められ、平野・低地は北上山地から東流する閉伊川の流域と、山田町から北流する津軽石川の流域、及びこれらの支流域に僅かに見られるのみである。宮古湾から津軽石川に至る津軽石断層を境に、東部には十二神山(731m)を最高位とする重茂半島の山地帯が太平洋に張り出し、西部は北上山地から続く丘陵・山地となっており、閉伊川によって南北に分断されている。山地帯の縁辺に形成された丘陵地は小河川により樹枝状に開析され、末端は尾根状を呈する。これらの丘陵縁辺や山麓緩斜面に多くの遺跡が所在し、市内の遺跡総数は469ヶ所となっている。

小沢Ⅱ大上遺跡(LG24-2080)は、JR宮古駅の北々東約700mに位置し、中心市街地にある宮古小学校北側の小沢一丁目地内に所在する。南西に広がる閉伊川低地と北東側の丘陵の間に形成された緩斜面に立地しており、背後の丘陵は黒森山山地に続き、低地帯は南に1km程で閉伊川に接する。遺跡は北東部の谷末端の緩斜面から南半部の丘陵縁辺の緩斜面にかけて広がり、南北約300m、北東部の奥行きは200m程で、南半部では幅30~50mと狭まり全体に「く」の字状の範囲となっている。標高は南半部で6~14m、北東部では9~40mで、平均傾斜度は8~9°である。遺跡南西の低地は標高3~5mで、現在では住宅地となっているが、昭和30年代までは水田が広がる低湿地であった。北東背後の丘陵縁辺は、傾斜度30°前後の斜面となっており、標高100m程の尾根に至る。周辺遺跡の立地



遺跡の位置と周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)

Fig. 1

や調査例などから、尾根上にも遺跡が存在する可能性はあるが、小沢Ⅱ大上遺跡は丘陵と低地の間の南西向き緩斜面を主な範囲とした遺跡と考えられる。

(2) 周辺の遺跡

小沢地区には、小沢Ⅱ大上遺跡の北東に隣接して小沢貝塚、さらに北東部には小沢Ⅲ石倉平遺跡、小沢Ⅳ人形鼻遺跡、小沢Ⅴ神籠石遺跡があり、縄文時代及び古代の遺物が分布している。これらの遺跡についてはこれまでに発掘調査の事例はなく、遺跡の内容については明らかではないが、表面採集遺物によって各々の存続時代の概要は把握されている。

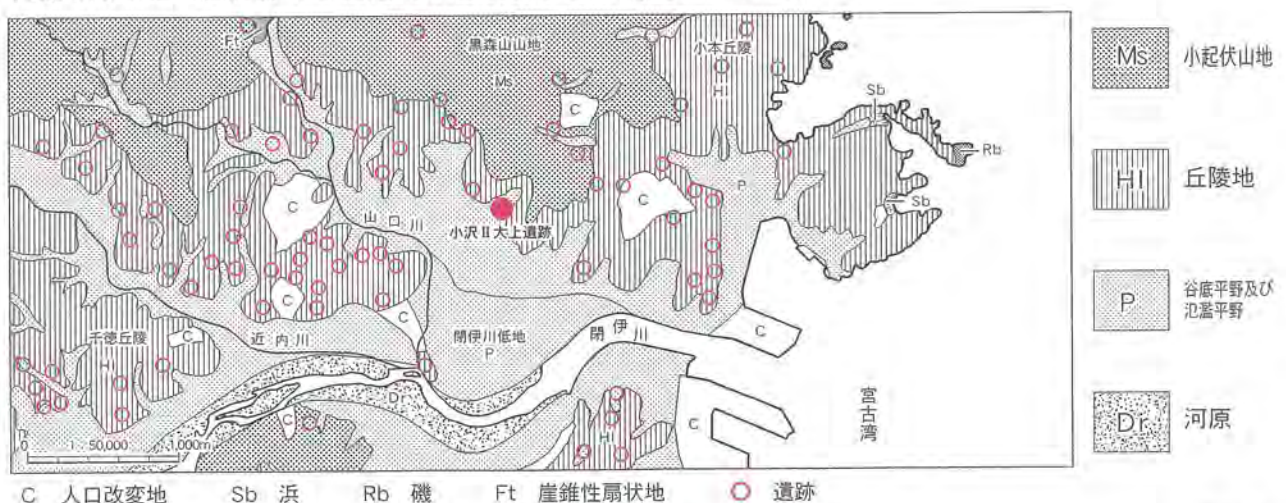
小沢貝塚は、小沢Ⅱ大上遺跡と同様に丘陵と低地の間の緩斜面に立地し、かつてより貝層の存在が知られていたが、その規模・内容は確認されていない。遺物は縄文時代前期・中期・後期の土器、土偶、石剣及び奈良時代の土師器などが採集されている。

小沢Ⅲ石倉平遺跡は小沢貝塚の北東約300mの地点にあり、丘陵中の沢沿いに開けた緩斜面に立地している。東西を丘陵斜面に挟まれており比較的小規模な遺跡であるが、縄文時代中期・後期の土器と土偶(後期)が出土している。この遺跡の北東には、同様な立地に小沢Ⅳ人形鼻遺跡、小沢Ⅴ神籠石遺跡が隣接して所在する。小沢Ⅳ人形鼻遺跡では縄文時代後期の土器及び土師器・須恵器、小沢Ⅴ神籠石遺跡では縄文時代晩期の土器・土偶及び土師器が表面採集されており、遺物量では縄文時代の土器が主体を占めている。これまでに確認された遺物から、これら隣接する三遺跡は主に縄文時代中期から晩期にかけて存続した集落遺跡と考えられ、その後平安時代にもここが生活の場とされていたことが推察される。

小沢地区の西方の丘陵中には拝殿峠遺跡、拝殿ヶ沢遺跡、黒森町遺跡、山口館跡などの遺跡があり、縄文時代後期、奈良、平安時代、中世、近世の遺物や遺構が確認されている。黒森町遺跡は標高21～28mの丘陵末端に立地し、1991年にその一部で調査が行われている。検出された遺構は墓墳が19基、掘建柱建物跡2棟、铸造炉2基などで、出土遺物から17～18世紀の所産と考えられている。

山口館跡は標高50～120m程の丘陵尾根に構築されており、館跡南西の緩斜面では奈良時代の竪穴住居跡が12棟、平安時代の竪穴住居跡4棟などの遺構が検出されており、このうち平安時代後期とされているSI14竪穴住居跡からは、三鈷鏡・錫杖頭・鐘鈴の鉄製密教法具が出土している。

小沢Ⅱ大上遺跡から閉伊川低地を隔てた南西の丘陵には、長根・泉町・鴨崎遺跡群があり、奈良・平安時代の竪穴住居跡や8世紀代の古墳群などが調査されている。



地形分類と遺跡分布図 (1:50,000)

Fig. 2

3 調査内容

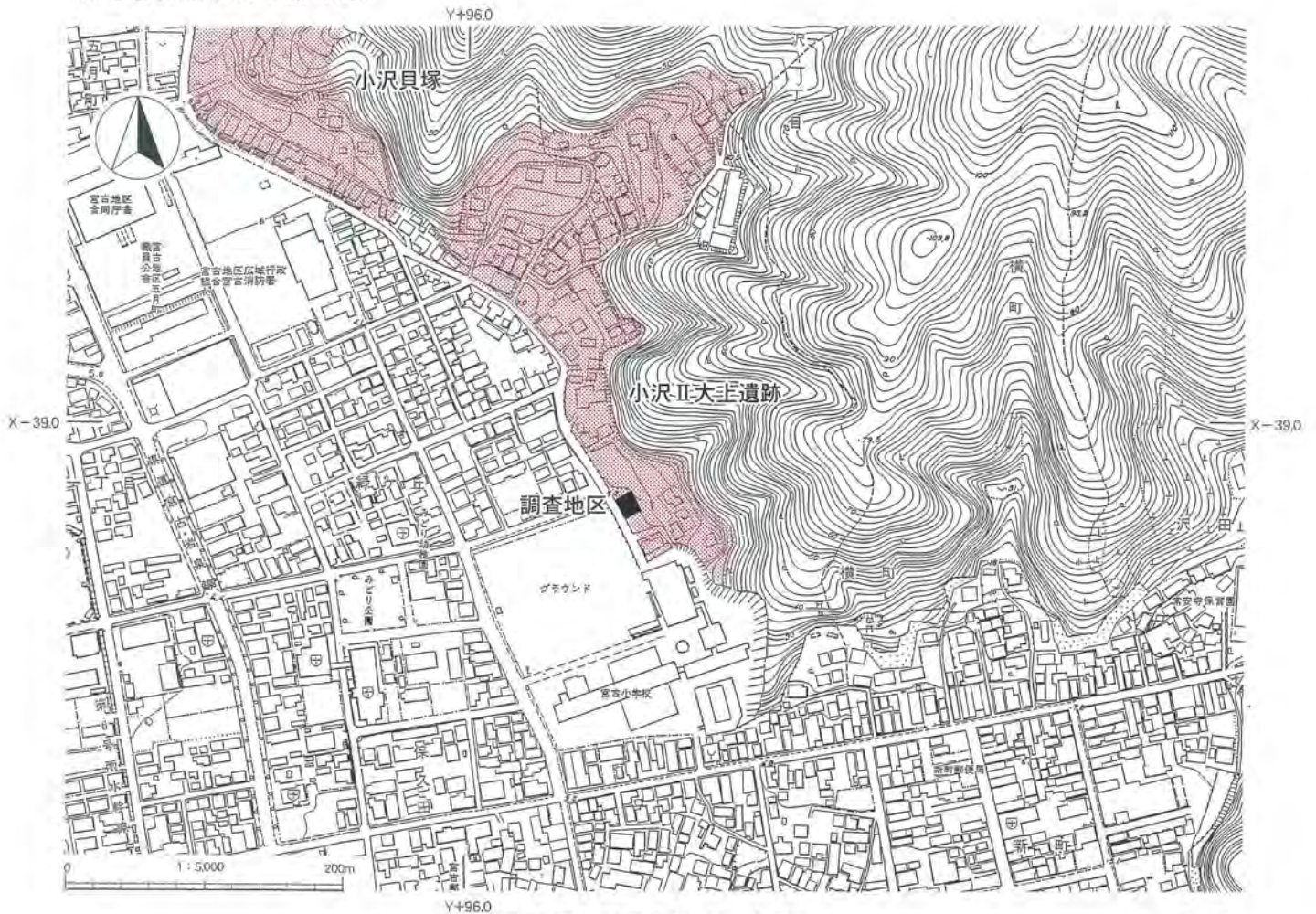
(1) 調査地区

調査地区は宮古小学校の北東に位置し、校庭沿いの市道に接した畑地の一部である。この畑地は、標高が6～12mの緩斜面で、南北70m、東西30～40m程の範囲に広がっており、小沢Ⅱ大上遺跡の南端部にあたる。本遺跡の範囲内では最も広範囲に旧来の状況を保っている地区である。調査地区は畑地の西辺のほぼ中央の地点で、標高6.7～7.8m、傾斜度4°前後の南西向きの緩斜面である。

調査地区に接する市道を境に、西側は閉伊川低地となっている。市道部分の標高は5.2m前後で、調査地区とは1.5mほどの落差があり、さらに西側の校庭及び住宅地では標高4m前後となる。この低地帯は昭和8年の航空写真では、小学校とその周辺を除き全面に水田が広がっていた状況がみられる。

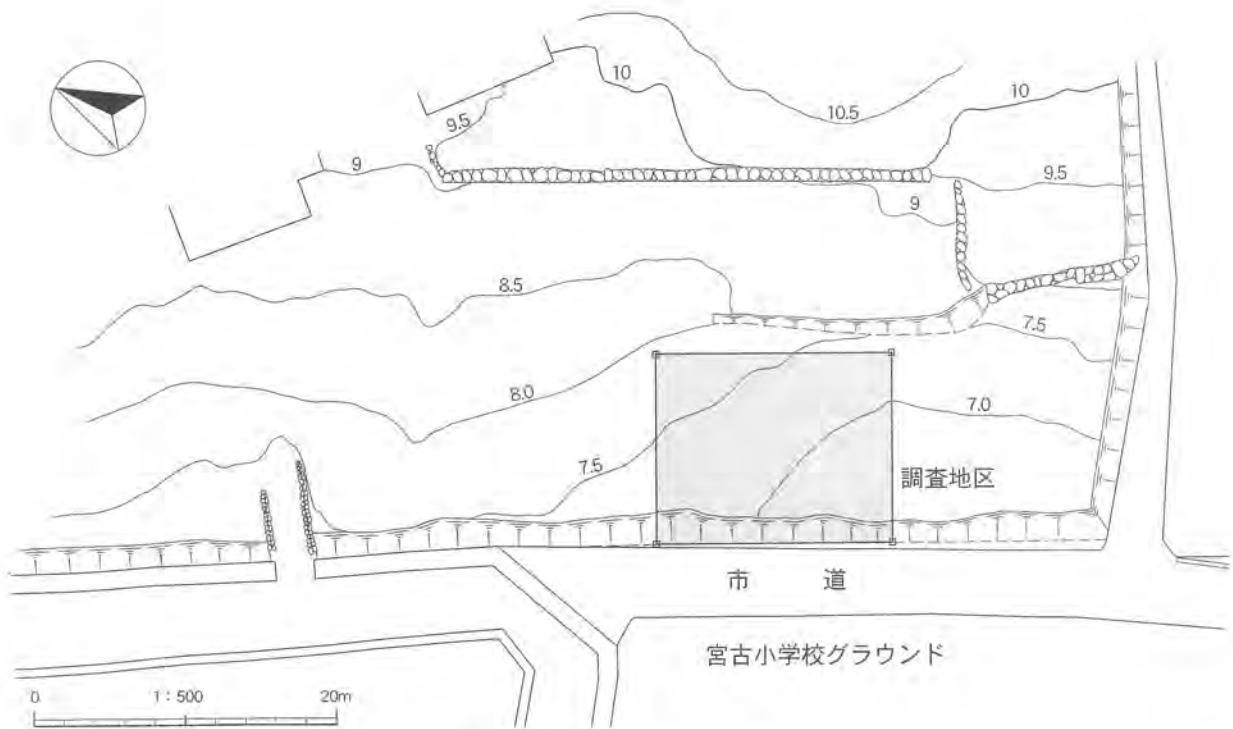
調査地区の東側は30mほど緩斜面が続き、石垣積みの2段の畑とその奥に宅地があり、丘陵斜面に至る。東背後の丘陵部は大小の沢によって開析され、尾根は樹枝状に広がりその縁辺部は低地に至る急斜面となっている。主体となる尾根は標高は100mを越し、尾根上にも一部緩斜面が見られる。沢沿いや尾根筋には山道があり、北東の日の出町・中里地区に通じている。また丘陵の南西端付近は大正時代に学校用地の造成のため掘削されて地形が改変されており、本遺跡の範囲がこの地区まで広がっていた可能性も考えられる。

小沢Ⅱ大上遺跡は、これまでの分布調査で縄文時代の遺跡として分布図に記載されていたが、事前の現地踏査では土師器の甕の破片も採集され、調査地区及びその周辺では古代の遺物が分布資料の主体を占める状況であった。



調査地区と周辺地形 (1:5,000)

Fig. 3



調査地区地形図 (1 : 500)

Fig. 4

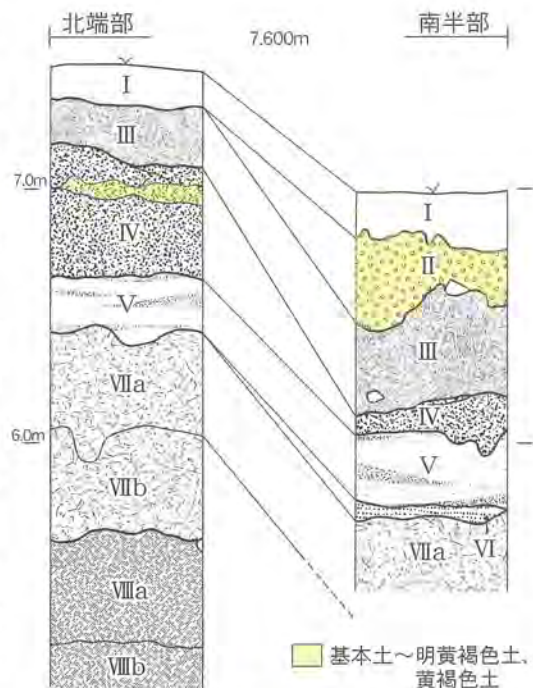
(2) 基本層序

堆積土層の観察・記録は調査地区の北縁及び小区画の断面で行った。基本土層は最深部まで掘り下げた調査区北縁の中央部で確認し、これを柱状図として図示した。また調査区内で部分的に堆積する土層もあることから、層序対比のため調査区南半部の堆積状況を同様に示し、これらで全体の堆積土層の状況を概述する。なお、細別層の内容については別項で土層断面図と併せて記し、ここでは大別層の層相について報告する。

I層 褐色砂壤土(10YR4/4SL)を基本土とし、黄褐色砂土(10YR5/6S)が2%粉状に混入する。軟質で粘性、しまりともに弱く、粉状構造を呈する。層厚は10~20cm程で、II層との層理面は調査地区北半の一部を除き細かな凹凸を成す。土師器、鉄滓、鉄製品、陶磁器、石鏃などの遺物を含む。

最上位の表土層で、畑の耕作による攪乱を受けており、南半部で顕著に観察される層理面の凹凸は耕作痕と考えられる。

II層 明黄褐色砂土(10YR6/6S)を基本土とし、にぶい黄褐色砂壤土(10YR5/4SL)が3%粉粒状に混入する。軟質で粘性は無くしまりも弱く、粉粒状構造を呈し、III層との層理面は規則的な凹凸を成す。層厚は10~40cm程で、文久永寶、土師器、陶磁器、鉄製品、鉄滓、花崗岩礫などが含まれる。



基本土層図 (1 : 30)

Fig. 5



遺跡周辺垂直写真
(昭和54年撮影)
photo.16



調査前の状況
(北西→)
photo.17

基本土層 (北端部)

photo.18



基本土層 (南半部)

photo.



II層は調査区の北半部では断続的に見られ、幅30cmほどの筋状に検出された。南半部ではほぼ全面に堆積し層厚も厚くなっている。なお基本土である明黄褐色砂土は基盤の花崗岩が強く風化したいわゆる真砂土と呼ばれるもので、この層が基盤土を起源とする土層であることを示している。

III層 暗褐色砂壤土(10YR3/3SL)を基本土とし、褐色砂壤土(10YR4/4SL)が1%粉状に混入する。軟質で粘性、しまりともに弱く、粉状構造を呈し木炭粉を微量含む。層厚は20~50cm程で、IV層との層理面は細かな凹凸を成す。

遺物は鉄銭、土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品、鉄滓、羽口、石鎌、貝殻、木炭、炭化種子、ガラス片などが含まれる。またII層との層理面に見られる規則的な凹凸は畑の畝跡であることが確認され、この層がII層堆積直前の旧耕作土を構成する土層であると判断された。

IV層 黄褐色土、黒褐色土、暗褐色土等を基本土とし、塊状ないし粉粒状構造を成す。層厚は20~70cm程で、調査区中央部ではこの層の堆積は見られない。IV層の北半部は小単位層で構成され、19層に細分される。これらの細別層は西南向きに傾斜して堆積しており、概ね軟質でしまりも弱い。一方南半部では層相が異なり小単位層は見られず、褐色土を基本土とする層厚20cm程のほぼ水平な堆積層として存在する。ここでは細別二層で構成され、上位に見られる部分的な薄層が分層され、この層は特に硬く締まっている。

遺物は寛永通寶、土師器、陶磁器、鉄製品、鉄滓、羽口、石鎌などが含まれる。北半部の小単位層は明らかに人為的に形成されたものと考えられる。

V層 黒褐色砂壤土(10YR3/2SL)を基本土とし、褐色砂土(10YR4/4S)が5%層状及び粉状に混入する。軟質でしまり、粘性ともに弱く、層状及び粉状構造を呈する。調査区全面に堆積しており、層厚は20~50cm程である。北半部ではVII層と接しており、この層との層理面はやや規則的な凹凸を成している。遺物は土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品、鉄滓、剥片石器が含まれる。

VI層 暗褐色砂壤土(10YR3/3SL)を基本土とし、褐色砂土(10YR4/4S)が40%層状及び粉状、また黒褐色壤土(10YR2/2L)が2%粉粒状に混入している。やや軟質で層状構造を成し、層厚は最大20cm程で、VII層との層理面はやや規則的な凹凸を成している。北半部及び南端部ではこの層の堆積は見られず、遺物は少量の土師器、須恵器、鉄滓などが含まれる。

VII層 黒褐色砂壤土(10YR3/2SL)を基本土とするやや軟質の堆積層で層厚は80cm程あり、土師器、鉄製品、鉄滓を含む。調査区全体に堆積が見られ、混入土の差異により二層に細分される。この層の上面は南北方向の土層断面でやや規則的な凹凸が見られる。

VIII層 黒褐色砂壤土(10YR2/2SL)を基本土とする土層で、調査区北端部のテストピットで確認されている。層厚は60cm以上あり、VII層に較べやや硬質な土層で、混入土の差異により二層に細分される。遺物はこの層の上面から鉄滓が出土している。

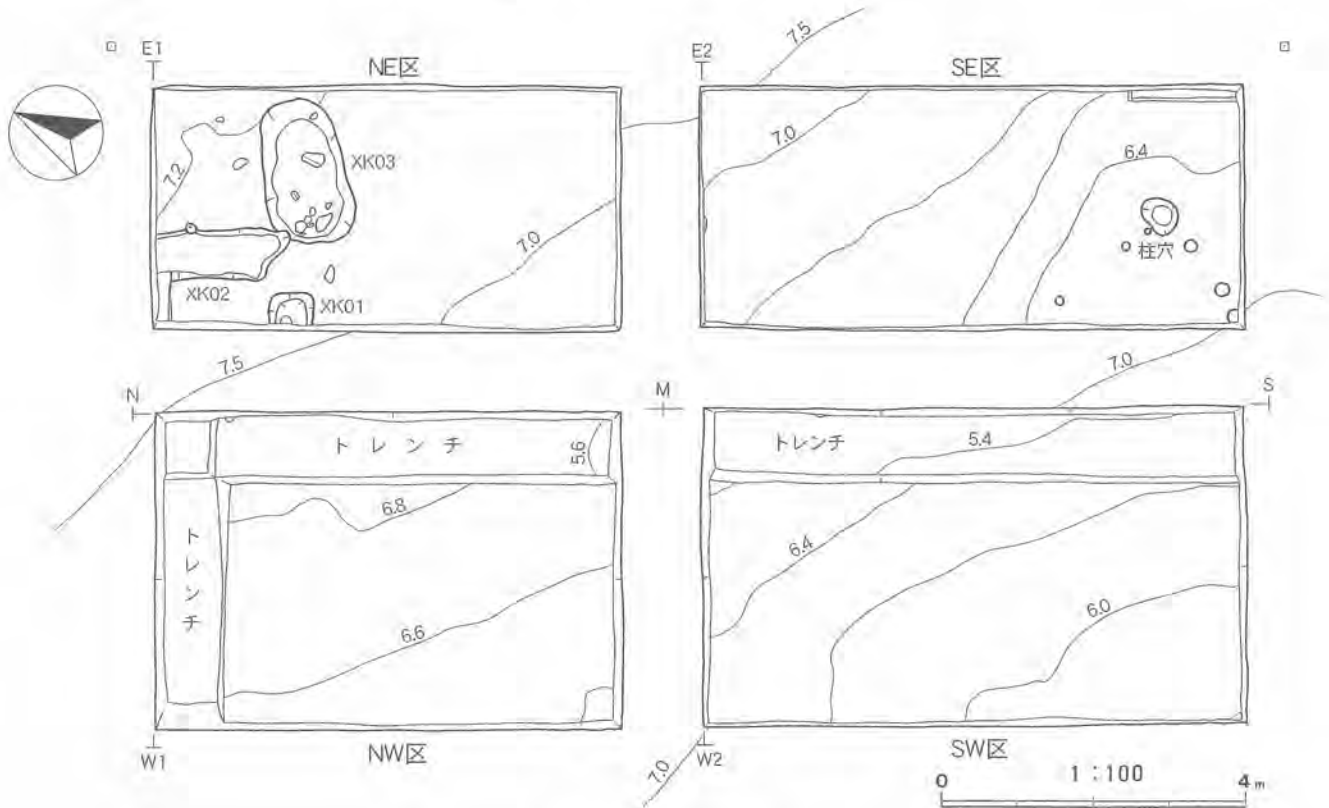
(3) 遺構の検出状況

調査は対象地区内を幅1mの区画帯で四分割し、NE、NW、SE、SW区の小区画を設定して行った。表土下には明黄褐色砂土を基本土とするII層の堆積が見られ、これを除去するとIII層上面に畝跡が検出された。旧耕作土であるIII層上位からはガラス片などが出土し近來の耕作痕と考えられたことから、これについては写真などの概略記録に止め、さらに下位の遺構の検出を行った。

NE区の北半ではIV層からXK02、03の土坑が検出され、SE区南半部ではIII層下半で不明確では

あるが僅かに土色の変化が見られたため、この部分を掘り下げ遺構の確認を行ったところ、SE区南西部のIV層最上位に対応するから面から柱穴が検出された。

NW区の北半ではIII層下に黄褐色土と黒褐色土が混入するIV層の小単位層が見られたが、NE区南半及びSW区では遺構は確認されなかった。しかしこれらの層には遺物が含まれており、各層の遺物の包含状況とさらに下位層における遺構・遺物の有無、またIV層の小単位層の堆積状況などの確認のため、トレンチを設定して調査を進めた。調査の結果、トレンチ内では遺構は検出されず、遺物についてはVIII層までの各層に包含されていることが確認された。なお各区画での遺構確認面はIII層中位ないしIV層上面で、トレンチ内ではVII層となっている。



調査区全体図 (1:100)

Fig. 6

(4) 遺物包含層

調査によって確認された大別八層にわたる各土層からは、古代以降の遺物と若干の縄文時代の遺物が出土している。これらの堆積土層から出土した遺物は、堆積時における調査地区周辺の遺跡の状況を示すと共に、その堆積時期を検討する資料となるものである。また各土層の堆積状況は現況地形に至るまでの微地形の形成過程を示しており、特に人為的な関与が見られるIV層については、意図的な土層形成という行為を示すものである。ここでは間接的にまた直接的に人為的な関わりが見られるこれらの遺物包含層について各層の堆積状況、細別層の内容、出土遺物の概要を記し、次の項目で遺物の詳細を報告する。

・ I層

現在の耕作土で、調査前にも畝の痕跡が若干見られ調査区北半ではほぼ南北方向、南半では東西方向に畝が立てられていた。II層との層理面に見られる耕作痕は、NW区北半では顕著な凹凸は見られず、同区南半で畝状の規則的な凹凸を成し、SW区では不規則に入り組んだ凹凸となっている。これ

らの耕作痕の差異は、畝の方向や作物の違いに起因するものと考えられる。耕作痕の最も深い部分は局部的ではあるがSW区で地表下34cmまで至っていることが土層断面で観察され、平面的にも不規則な耕作土の入り込みが認められ、部分的に深く下位層を攪乱している状態が見られた。

調査区北縁部では下位のII層は見られず、耕作土は直接III層と接しており、この部分では入り組んだ耕作痕は見られない。調査区北半中央部では、II層がIII層の合間に東西方向の筋状に検出され、その南側の調査区南半部分では全面にわたってII層が堆積し、その上面が耕作の攪乱を受けている。

なお、SW区の西端及び南半の一部にはI a層が見られる。基本土はI層と同一の褐色砂壤土を基本土とし、明黄褐色砂土が3～5%粉状に混入する。軟質でしまり、粘性ともに弱く、粉状構造を呈する。層厚は10cm前後で層理面は凹凸を成し、一部では深さ20cmの掘込状にII層に入り込んでいる。II層の基本土である明黄褐色砂土が混入しており、I a層も耕作に伴う攪乱土層と考えられる。

遺物は地表面から土師器甕口縁部及び底部破片、陶磁器、石鎌が採集されており、I層中からは土師器内黒坏及び甕口縁部破片、陶磁器、角釘、鉄滓、羽口、木炭などが出土した。土師器甕破片には内面にハケメ調整が施されるものやロクロ成形された破片も見られ、陶磁器では鉄釉陶器、染付磁器などがある。このほかに赤褐色を呈し厚手で酸化炎焼成の土器細片も少数出土しているが、全体量としては土師器が主体を占めている。

・ II層

いわゆる真砂土を主体とする堆積層で、混入土の割合は少なく粉粒状構造を呈し、拳大から人頭大の花崗岩礫が点々と混在している。礫はSE区からSW区西半に比較的多く、土層断面にも見られるようにIII層上面の畝間に落ち込むように点在する。このような礫の混入状態と層相から、II層は短期間に一括堆積した土層と考えられる。また調査区南半部ではこの層によって畝跡は完全に埋没しており、調査区南西部にも広がっているとみられることから、堆積土量も少なからぬものと推察される。

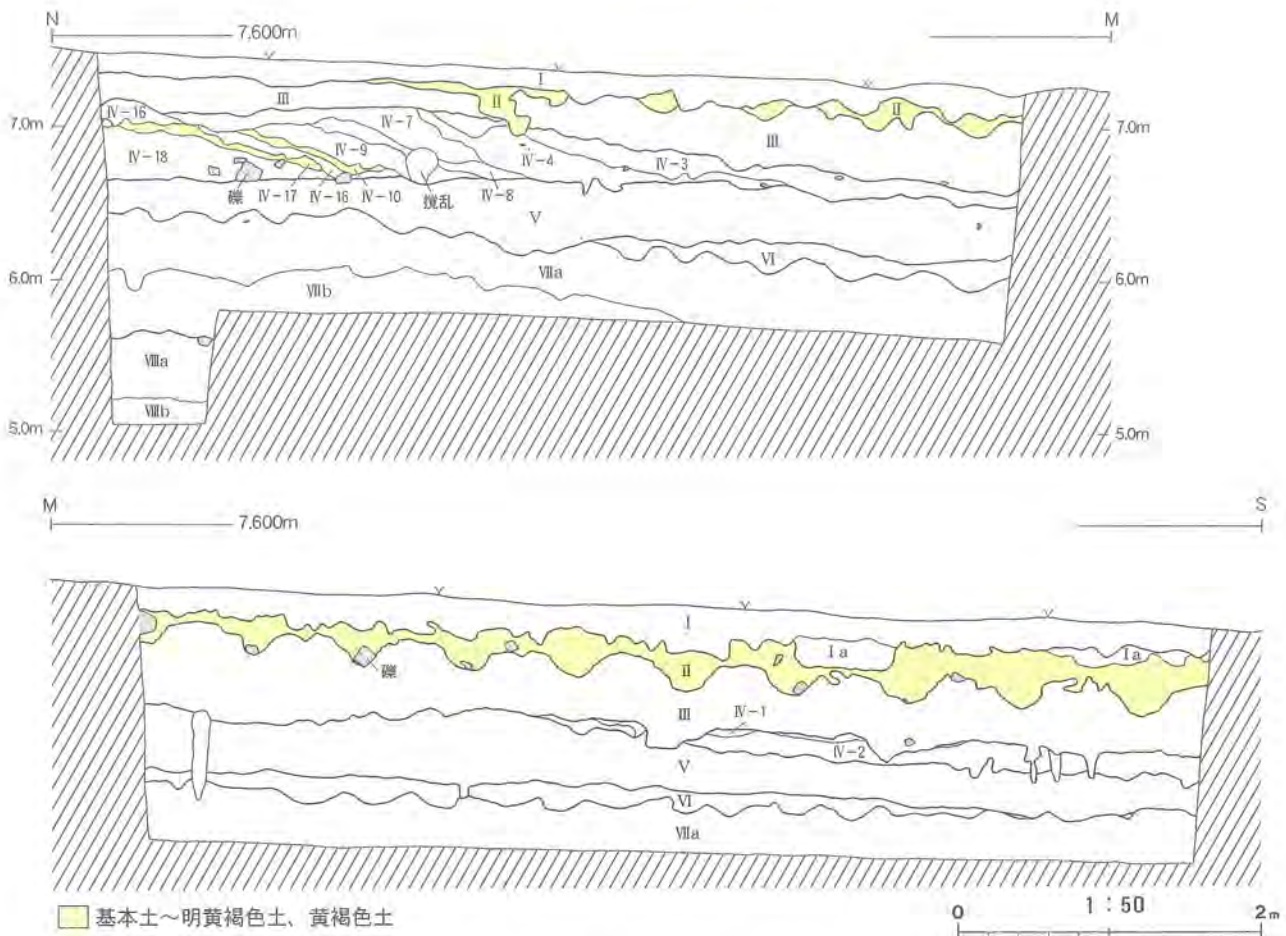
II層の成因については、畑の傾斜緩和のための土砂搬入ということもあり得るが、覆土された畝跡の保存状態が良好であること、人為的な土砂搬入の痕跡が明瞭でないこと、またこの層の主体土が基盤土起源の明黄褐色砂土であり一括堆積とみられることなどから、自然営為による不時の堆積という可能性が考えられる。

遺物は土師器内黒坏底部、甕口縁部破片、赤褐色厚手土器、鉄滓、角釘、陶磁器などが出土した。土師器には内面あるいは外面にハケメ調整が施された甕胴部破片や糸切りの内黒坏があり、陶磁器は染付磁器、鉄釉陶器、摺鉢が見られる。また近來の煉瓦片が混入していたほか、畝底のII層最下位からは文久永寶が出土している。遺物量は比較的少なく土師器、角釘がその主体である。

・ III層

II層堆積直前の旧耕作土を構成する土層である。III層の上面には耕作が行われたことを示す畝跡が検出されている。畝跡の形状については後の項で詳述するが、保存状況が極めて良好であり、特に調査区南半部ではII層によって完全に覆土されていたため、15～20cmの畝高を保った状態で検出された。III層の基本土は暗褐色砂壤土(10YR3/3SL)であるが、SW区南半のIII層下半部では色調が若干異なり10YR3/4の暗褐色に漸移しており、この部分でクルミ、米などの炭化物や木炭が含まれている。

遺物は土師器内黒坏、甕胴部破片、須恵器、赤褐色厚手土器、陶器、染付磁器、摺鉢、鉄銭、角釘、羽口、鉄滓、キセル吸い口、銅製品、石鎌、貝殻、円礫のほか、最上位からはガラス片、足袋のこはぜなどが出土した。土師器には内面あるいは外面にハケメ調整が施された甕胴部破片も見られ、染付磁器には二重網目文の碗破片がある。



遺物包含層土層断面図 (N-S)

Fig. 7

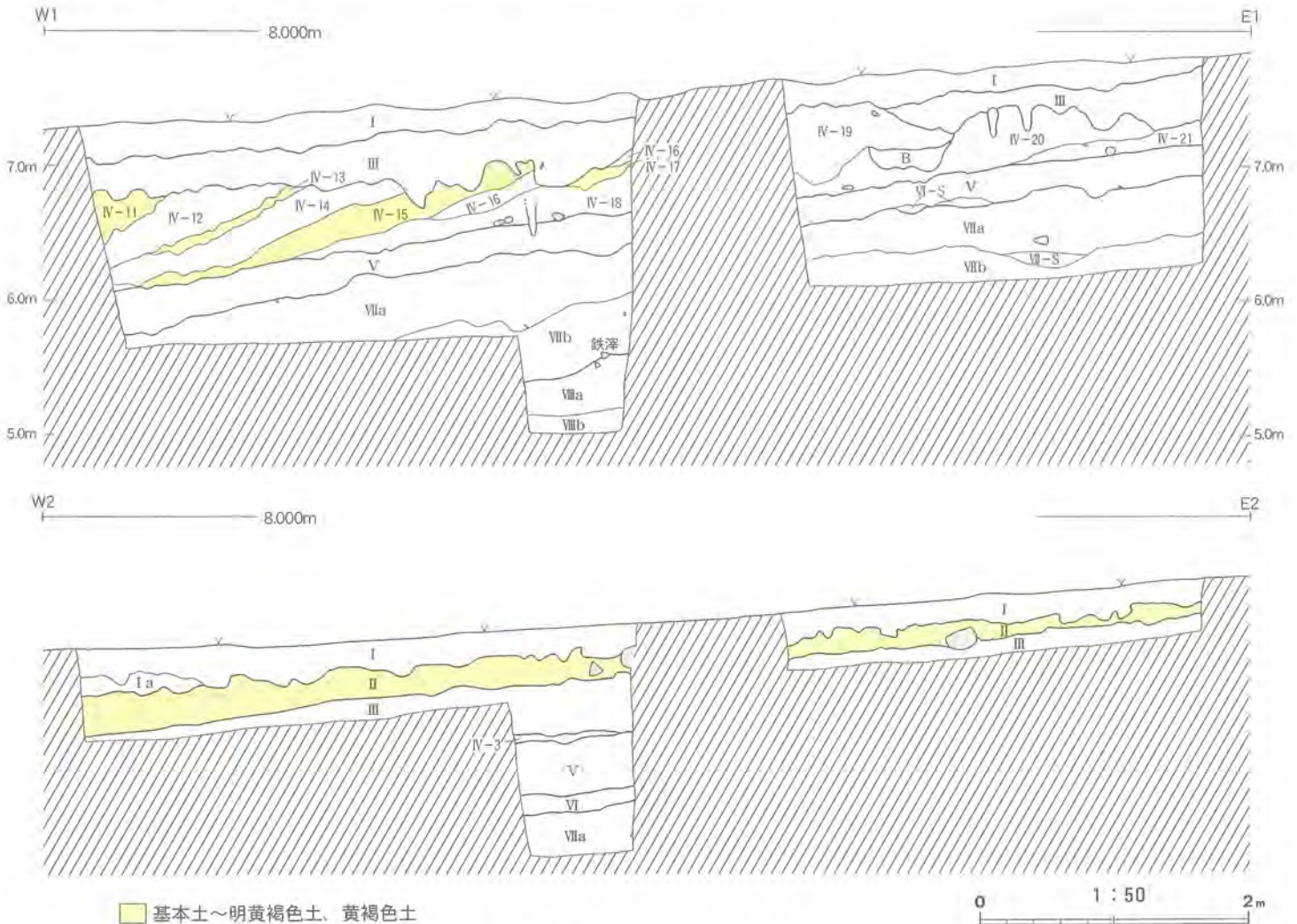
層名	基本土	混入土	硬さ・構造・混入物
表土 I	10YR4/4 褐色砂壤土	10YR5/6 黄褐色砂土 2% 粉状	軟質 粉状構造 土師器、鉄滓、石礫
堆積土 Ia	10YR4/4 褐色砂壤土	10YR6/6 明黄褐色砂土 3~5% 粉状	軟質 粉状構造
堆積土 II	10YR6/6 明黄褐色砂土	10YR5/4 にぶい黄褐色砂壤土 3% 粉粒状	軟質 粉粒状構造 土師器、文久永寶
堆積土 III	10YR3/3 暗褐色砂壤土	10YR4/4 褐色砂壤土 1% 粉状	軟質 粉状構造 土師器、陶磁器
堆積土 IV-1	10YR4/4 褐色砂壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土 10% 塊状・層状	硬質 塊状・層状構造 土師器、磁器
堆積土 IV-2	10YR4/4 褐色砂壤土	10YR3/3 暗褐色砂壤土 2% 粉状 10YR5/6 黄褐色砂壤土 1% 粉状	やや硬質 粉状構造 土師器、鉄滓 寛永通寶、染付磁器
堆積土 IV-3	10YR2/3 黒褐色砂壤土	10YR5/6 明黄褐色砂土 20% 粉状 10YR2/2 黒褐色壤土 3% 粒状	やや軟質 粉粒状構造 土師器、鉄滓、 陶器
堆積土 IV-4	10YR2/2 黒褐色壤土	10YR3/2 黒褐色砂壤土 7% 粉粒状	やや軟質 粉粒状構造 土師器、鉄滓
堆積土 IV-5	10YR5/6 黄褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色砂壤土 5% 粉粒状	軟質 粉粒状構造
堆積土 IV-6	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土 5% 粉粒状	軟質 粉粒状構造
堆積土 IV-7	10YR2/3 黒褐色砂壤土	10YR4/4 褐色砂土 3% 粉状 10YR2/2 黒褐色壤土 3% 粉状 10YR5/8 黄褐色壤土 1% 粒状	やや軟質 粉粒状構造
堆積土 IV-8	10YR3/2 黒褐色砂壤土	10YR5/8 黄褐色壤土 25% 粒塊状	軟質 粒塊状構造
堆積土 IV-9	10YR2/3 黒褐色砂壤土	10YR5/8 黄褐色壤土 2% 粉粒状 10YR2/2 黒褐色砂壤土 1% 粉状	軟質 粉粒構造
堆積土 IV-10	10YR5/8 黄褐色壤土	10YR2/3 黒褐色壤土 40% 粉粒状	軟質 粉粒構造
堆積土 IV-16	10YR3/2 黒褐色砂壤土	10YR2/2 黒褐色砂壤土 2% 粉状 10YR5/8 黄褐色壤土 2% 粉粒状	軟質 粉粒構造
堆積土 IV-17	10YR5/8 黄褐色壤土	10YR2/3 黒褐色砂壤土 30% 粉粒状	軟質 粒塊状構造 土師器、鉄滓
堆積土 IV-18	10YR2/3 黒褐色砂壤土	10YR5/8 黄褐色壤土 5~7% 粉粒状 10YR2/2 黒褐色砂壤土 3% 粉粒状	軟質 粉粒状構造 花崗岩角礫
堆積土 V	10YR3/2 黒褐色砂壤土	10YR4/4 褐色砂土 5% 層状・粉状	軟質 層状・粉状構造 土師器、陶磁器
堆積土 VI	10YR3/3 暗褐色砂壤土	10YR4/4 褐色砂土 40% 層状・粉状 10YR2/2 黒褐色壤土 2% 粉粒状	やや軟質 層状構造 土師器、須恵器、 鉄滓、羽口
堆積土 VIIa	10YR2/3 黒褐色砂壤土	10YR4/4 褐色砂土 3% 層状・粉状	やや軟質 層状構造 土師器、礫
堆積土 VIIb	10YR2/3 黒褐色砂壤土	10YR2/2 黒褐色砂壤土 3% 粉状	やや軟質 粉状構造 土師器、鉄滓
堆積土 VIIIa	10YR2/2 黒褐色砂壤土	10YR2/3 黒褐色砂壤土 1% 粉状	やや軟質 粉状構造 鉄滓、角礫
堆積土 VIIIb	10YR2/2 黒褐色砂壤土	10YR2/1 黒色壤土 2% 粉状	やや硬質 粉状構造

遺物包含層土層観察表

・IV層

IV-1層、IV-2層は調査区の南半部に見られる土層で、いずれも褐色砂壤土を基本土とする。IV-1層は黄褐色砂壤土を塊状ないし一部層状に10%含み、硬く締まっている。IV-2層の上位に部分的に存在し、層厚は2~5cmと薄く一部で10cm程の塊状に堆積する部分もある。

IV-2層は暗褐色砂壤土と黄褐色砂壤土を粉状に含み、やや硬く締まった土層である。層厚は20cm



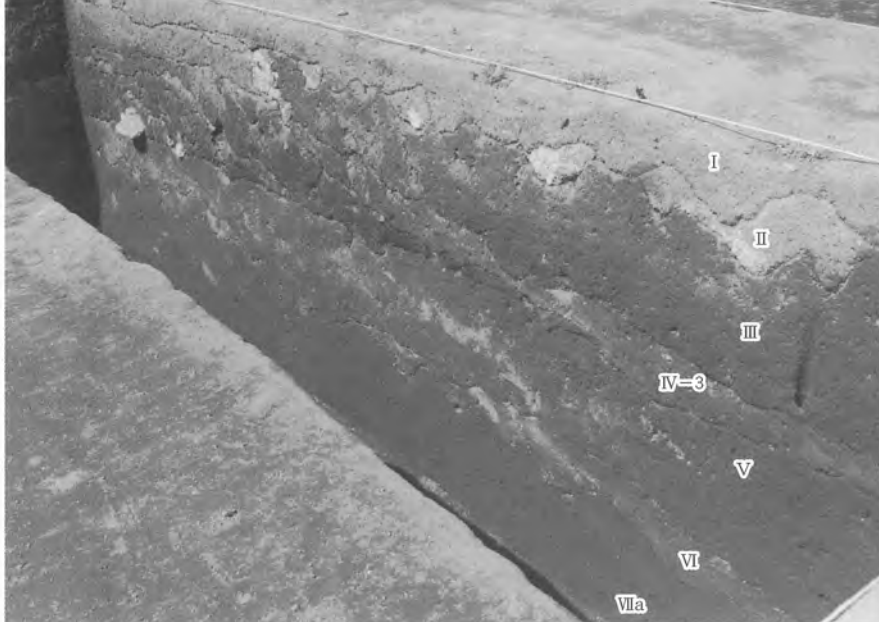
遺物包含層土層断面図 (E-W)

Fig. 8

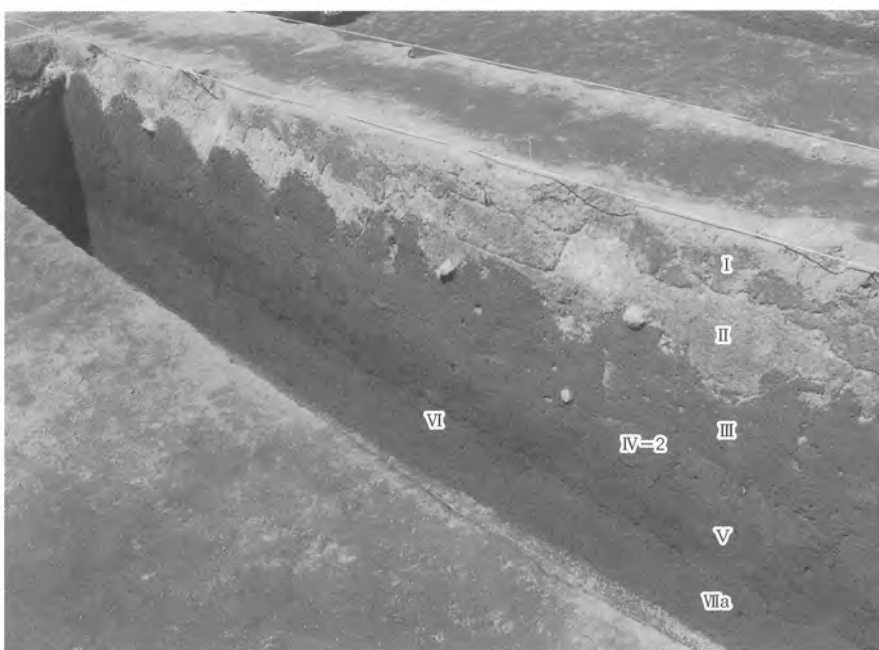
層名	基本土	混入土	硬さ・構造・混入物
堆積土 IV-11	10YR6/6 明黄褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色砂壤土 3%粉状	やや硬質 粉状構造
堆積土 IV-12	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR5/8 黄褐色砂壤土 2%粉粒状	軟質 粉粒状構造
堆積土 IV-13	10YR5/8 黄褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色砂壤土 3%粉状	軟質 塊状・粉粒状構造
堆積土 IV-14	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR5/8 黄褐色砂壤土 7%粉粒状	軟質 粉粒状構造
堆積土 IV-15	10YR5/8 黄褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色砂壤土 40%粉粒状	硬質 粉粒状構造
堆積土 IV-19	10YR3/2 黒褐色砂壤土	10YR5/6 黄褐色壤土 3%粒塊状 10YR2/2 黒褐色壤土 1%粉状	硬質 粒塊状構造 土師器、鉄滓
堆積土 IV-20	10YR2/3 黒褐色砂壤土	10YR2/2 黒褐色壤土 5%粒塊状 10YR5/6 黄褐色砂壤土 3%粒塊状	硬質 粒塊状構造 土師器、鉄滓、円礫
堆積土 IV-21	10YR2/3 黒褐色砂壤土	10YR2/2 黒褐色壤土 7%粉粒状 10YR4/4 褐色砂壤土 5%塊状	やや硬質 粒塊状構造 土師器、礫
堆積土 VI-S	10YR4/6 褐色砂土	—	軟質 層状構造
堆積土 VII-S	10YR4/6 褐色砂土	10YR2/3 黒褐色壤土 2%粉状	軟質 層状・粉状構造
XK02土坑埋土 B	10YR2/3 黒褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色砂壤土 5%粉状 10YR5/6 黄褐色壤土 1%粉状	軟質 粉状構造

遺物包含層土層観察表

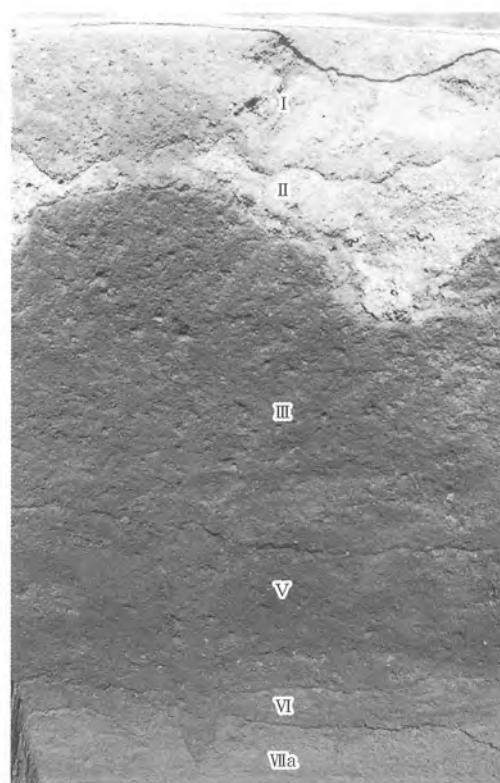
遺物包含層土層断面
(Section N-M)
photo.20

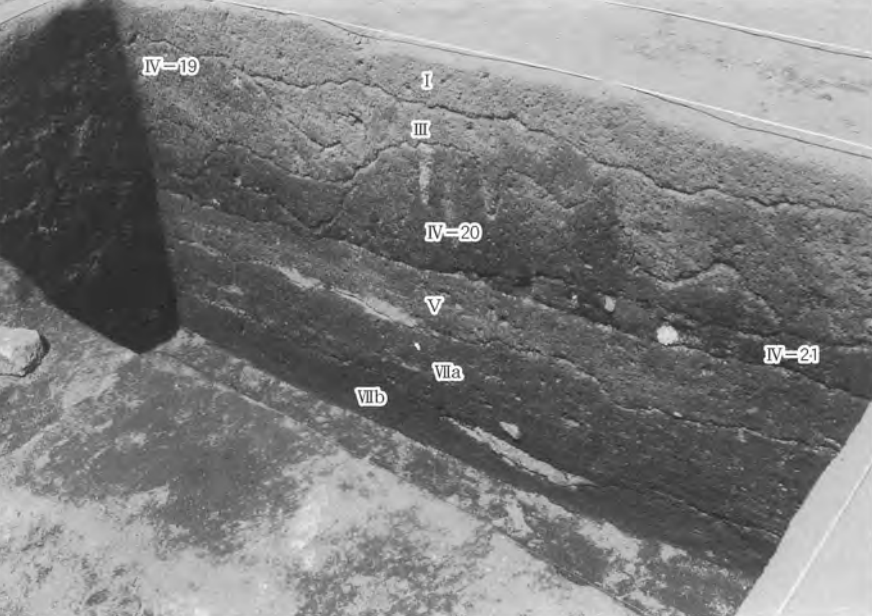


遺物包含層土層断面
(Section M-S)
photo.21



遺物包含層土層断面
(Section M-S 北端部)
photo.22





遺物包含層土層断面
(Section W1-E1 東半)
photo.23



遺物包含層土層断面
(Section W1-E1 西半)
photo.24



遺物包含層土層断面
(Section W1-E1 中央)
photo.25

前後で、その堆積はトレンチ南端から北に4.5mほどの範囲に限られる。これらの層の上面には、掘り込み状の凹部や木根状の入り込みが部分的に見られる。また、この上面は南北断面で約3°南に傾斜しており、これらの層の堆積前のV層上面の平均傾斜度5°に比べ若干傾斜が緩和されている。IV-1層、IV-2層は上位の堆積層に比べ硬質で締まっており、SE区ではその上面に対応する面から柱穴が検出されていることから、これらの層は生活面を構成する土層であり、黄褐色砂壤土の混入状態などからも人為的に形成された土層と考えられる。これらの層には土師器、鉄滓、染付磁器碗破片などが含まれ、IV-2層からは寛永通寶が出土している。

IV-3層からIV-21層は調査区北半部に見られる土層で、各層はすべて南ないし西に傾斜して堆積しており、各層の上面の傾斜角度は8～38°となっている。IV-3層は比較的広範囲に堆積するが、IV-4層から下位の各層は堆積範囲が狭く、層厚も比較的薄い小単位層となっている。IV-3層は黒褐色砂壤土を基本土とし、明黄褐色砂土と黒褐色壤土が混入し、やや軟質で粉粒状構造を呈する。層厚は10～20cmで、土層断面部分ではNW区南半の4mほどの範囲に堆積しており、検出平面では南北に最大70cmの幅で一部断続して調査区西端まで広がっている。上面はⅢ層、下面はIV-4層及びV層と接し、層理面には凹凸が見られ、遺物は土師器、角釘、鉄滓、陶器が含まれている。

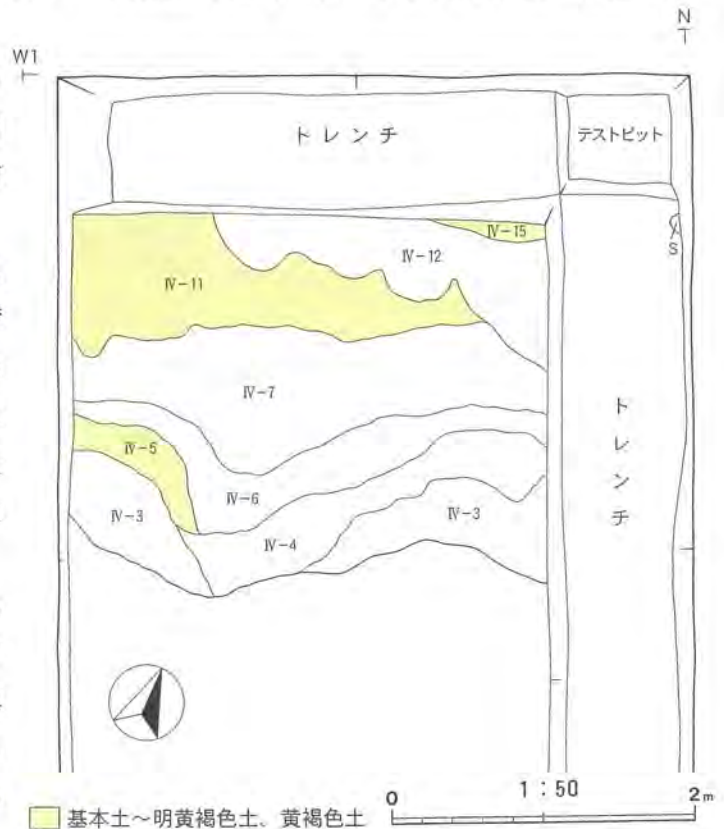
IV-4層は黒褐色壤土を基本土とする土層で、層厚は最大30cm、やや軟質で粉粒状構造を呈する。土層断面ではNW区のほぼ中央の2.5mほどの範囲に堆積しており、検出平面では20～50cmの幅で断面部分から西へ3.3mほどの広がりをもつ。土師器、赤褐色厚手土器、角釘、鉄滓、羽口、石鏝が出土しており、土師器には内外面にハケメ調整が施されるものや有段の内黒坏口縁部破片がある。

IV-5層、IV-6層はNW区北半のIV層検出面で確認された土層で、図示した土層断面部分には堆積は見られないが、検出平面ではIV-4層とIV-7層の間に帯状に介在している状態が観察された。IV-5層は黄褐色砂壤土に暗褐色砂壤土が混入する土層で、NW区西側で幅20～30cm、長さ1m程の範囲に部分的に見られる。

IV-6層は暗褐色砂壤土を基本土とし、黄褐色砂壤土が混入する軟質で粉粒状構造の土層である。平面では幅10～50cmの帯状に東西方向に検出されている。

IV-7層は黒褐色砂壤土を基本土とし、褐色砂土、黄褐色壤土などが混入するやや軟質で粉粒状構造の土層である。層厚は最大で26cmで、下位のIV-8、9、10層等を覆土するように水平に堆積し、南末端で31°の傾斜を成して上位のIV-4層と接する。NW区の検出平面では東西方向の帯状に堆積が見られる。

IV-8層は黒褐色砂壤土を基本土とし、黄褐色壤土が粒塊状に25%混入する軟質の土層である。層厚は4～10cmと薄く、南に約17°傾斜して1.5m程の範囲に堆積する。トレンチ外の検出平面には確認されておらず、東西方向の堆積範囲も小規模な土層とみられる。

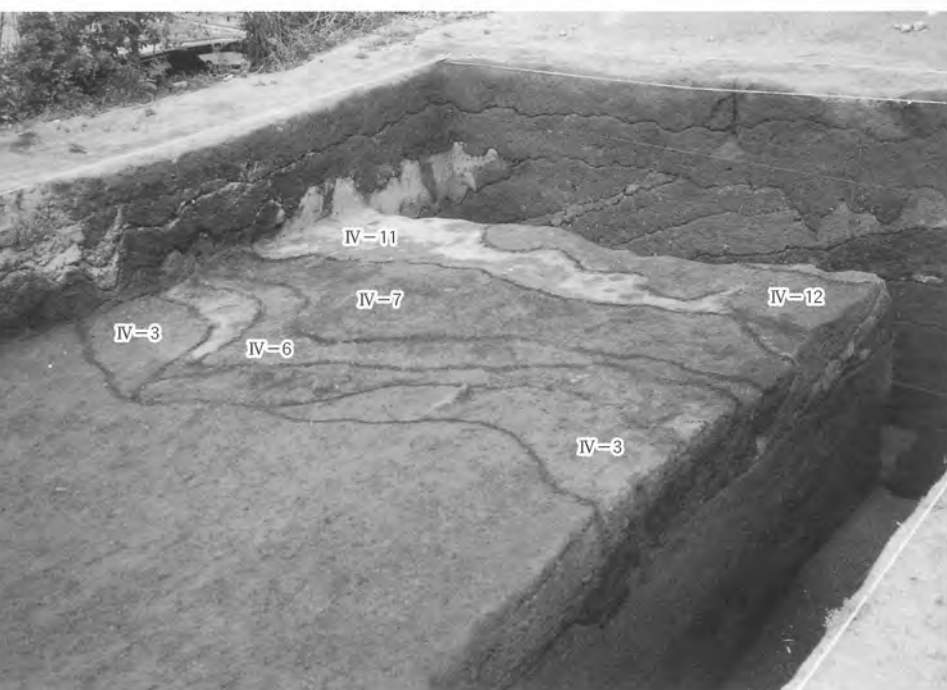


NW区IV層平面検出状況

Fig. 9



NW区IV層平面検出状況
(南→)
photo.26



NW区IV層平面検出状況
(南東→)
photo.27



NW区IV層平面検出状況
(北→)
photo.28

IV-9層は黒褐色砂壤土を基本土とし、少量の黄褐色壤土などが混入する軟質で粉粒状構造の土層である。層厚は最大で18cm、堆積の傾斜及び範囲はIV-8層と同様である。この層とIV-8層の断面に見られる不整円形の部分は極めて軟質で空洞化しており、何らかの腐食痕跡ないし攪乱とみられる。

IV-10層は粒塊状の黄褐色壤土を基本土とし、黒褐色壤土が粉粒状に40%混入する軟質の土層である。層厚は2～6cmと薄く、南に約16°傾斜して南北1mほどの範囲に堆積する。

IV-11層からIV-15層はNW区北縁の東西断面で確認された土層で、黄褐色土と褐色土が互層を成して堆積している。この断面では各層はすべて西に傾斜しており、その上面の傾斜角度は18°～38°となっている。IV-11層は東西断面の西端の一部に見られ、明黄褐色砂壤土を基本土とし、少量の暗褐色砂壤土が混入するやや硬い粉状構造の土層である。層厚は確認された範囲で最大30cmあり、上面をⅢ層と接し、その層理面は大きく凹凸している。この層は平面的にはNW区北西部で比較的広い範囲で検出されており、IV-7層とIV-12層との間に西方から楔状に入り込む平面状態で確認されている。

IV-12層は暗褐色砂壤土を基本土とし、少量の黄褐色砂壤土が混入する軟質で粉粒状構造の土層である。層厚は最大36cmあり、IV-11層との層理面は西に38°程傾斜している。検出平面では南及び西側でIV-7層、IV-11層、北側はIV-15層と接し、これらの間に弧状に介在している。

IV-13層は硬い塊状の黄褐色砂壤土を基本土とし、少量の暗褐色砂壤土が粉状に混入している。層厚は最大8cmと薄く、西に25°傾斜して堆積し、断面部分では東西1.3m程の範囲に見られる。IV-12層とIV-14層の間に薄く楔状に入り込む層で、断面西端では存在せず、平面的にも調査区内では狭小な範囲に検出されている。

IV-14層は暗褐色砂壤土を基本土とし、黄褐色砂壤土が混入する軟質で粉粒状構造の土層である。層厚は最大26cmあり、堆積状況は上位のIV-13層、IV-12層と類似して西方にかけて薄くなり、南側への広がりも調査区内では小範囲に止まる。

IV-15層は黄褐色砂壤土を基本土とし、暗褐色砂壤土を40%粉粒状に混入する軟質の土層である。層厚は最大で26cm、堆積は西に18°傾斜しており断面部分では東西3m程の範囲に見られ、平面的にも調査区北縁から1m程の範囲に広がっている。この層からは銅製品と、銅鋳滓ないし銅製品が熔融固着したとみられる遺物が出土している。

IV-16層は黒褐色砂壤土を基本土とし、黄褐色壤土などを少量混入する軟質で粉粒状構造の土層である。この土層は、NW区北東隅に堆積し一部で断続しているが東西・南北双方の土層断面で観察されており、南西方向に傾斜した堆積層である。層厚は14～6cmで礫を含んでいる。

IV-17層は塊状の黄褐色壤土を基本土とし、黒褐色砂壤土を粉粒状に混入する軟質の土層である。層厚は4～10cmと薄く、堆積は南西方向に傾斜している。この層には土師器、鉄滓などが含まれる。

IV-18層は黒褐色砂壤土を基本土とし、黄褐色壤土などを粉粒状に混入する軟質の土層である。層厚は最大34cm、南西方向にかけて薄くなり、拳大から人頭大の花崗岩角礫ないし亜角礫を含む。V層との層理面は南北断面でほぼ水平、東西方向では西に9°傾斜している。

IV-19～21層はNE区の東西断面で確認された土層である。IV-19層は黒褐色砂壤土を基本土とし、黄褐色壤土を粒塊状に混入する軟質の土層である。層厚は最大58cmあり、上位はI層及びⅢ層と接している。下位ではIV層中の土坑XK02の埋土上に堆積し、IV-20層との層理面は大きく凹凸している。土師器、鉄滓、陶器片及び花崗岩中礫を少量含んでいる。

IV-20層はIV-19層とほぼ類似した土層であるが、黒褐色壤土の混入状況の差異で分層したもので、土師器、鉄滓、円礫などを含んでいる。層厚は最大40cm程あり、Ⅲ層との層理面は木根状の入り込み

や大きな凹凸が見られる。

IV-21層は黒褐色砂壤土を基本土とし、褐色砂壤土を塊状に混入する比較的硬い土層である。層厚は最大で18cmあり、西方に傾斜してV層上に楔状に堆積しており、土師器、花崗岩の亜円礫を含む。

・V層

調査区全面に堆積する層で、層厚の平均は30cm程で褐色砂土の混入があり、層状構造を呈する部分が多く見られる。砂土の状態は中砂、粗砂、砂鉄で構成される小単位の葉層が層中の全般にわたって観察されることから、この層は雨水による砂土の流入を繰り返し受けながら形成されたものと考えられる。V層上面は南北断面では北半部でほぼ水平な状態を保ち、南半部では南に5°程傾斜してやや凹凸のある層理面となっている。東西断面では西に7～9°程傾斜し、比較的凹凸の少ない層理面を成している。遺物は土師器甕及び内黒坏破片、須恵器、角釘、鉄滓、円礫の他、下半部から染付磁器碗口縁部破片、鉄釉陶器細片が各一点出土しているが、量的には土師器と鉄滓が主体を占める。

・VI層

土層断面では調査区南端部と北部を除く約9mの範囲に層厚20cm程で堆積が見られる。基本土はV層とほぼ類似しており混入土の堆積状況も葉層を成しているが、褐色砂土の混入量が40%程と多く、この差異によってVI層として分層したものである。V層よりも頻繁にまた量的にも多く、含水土砂の流入を受けながら堆積した層であると考えられる。VII層との層理面には規則的な凹凸が見られ、その凹部には中砂から粗砂への明瞭な水成堆積層が観察され、一部に砂鉄の自然堆積層も見られる。東西断面のVIIa層最上面に見られるVI-S層は褐色砂土の純層で、層厚は最大8cm、東西約70cmの範囲に堆積しており、この部分でもVI層と同一層序で砂土の流入があったことを示している。

遺物は須恵器長頸瓶口縁部、土師器、鉄滓、羽口片、円礫などが少量出土しているが、陶磁器は見られなかった。

・VII層

調査区全面に堆積する層で、混入土の差異により二層に細分される。上位のVIIa層は褐色砂土が混入し層状構造を呈するもので、この層にも砂土の葉理状の堆積が見られる。層厚は20～50cmで、南北断面ではその上位に規則的な凹凸が見られる。遺物は量的には鉄滓が主体を占めており、土師器内黒坏、甕底部破片、角釘などが出土し、円礫、角礫を含む。

下位のVIIb層は黒褐色砂壤土が混入する粉状構造の土層で、層厚はテストピット部分では40cm程となっており、土師器、鉄滓、円礫が含まれる。NE区の東西断面ではこれらの層の間にVII-S層が見られる。これは褐色砂土のほぼ純層で、層厚は最大12cmでVIIb層上面の凹部に60cm程の範囲で堆積している。

・VIII層

テストピット部分で確認された土層で、混入土の差異により二層に細分される。上位のVIIIa層は褐色砂壤土が粉状に混入し、VII層に比べやや硬質である。層厚は24～40cm程あり最上位に鉄滓、角礫を含む。下位のVIIIb層は黒色壤土が粉状に混入する土層で、かなり含水しており硬さはVIIIa層と同様であり、遺物は出土しなかった。VIIIb層上面は地表面から深さ2.3m程あり標高は5.2m前後となり、調査区西側の市道の標高とほぼ同一である。VIIIb層を20cmほど掘り下げた面で層位の確認を終了したが、検土杖の探査ではさらに1mほど深さで同様な土質の堆積土が続き、礫が含まれる感触があるのみで硬さの変化も認められなかった。したがって基盤層は、テストピット部分では標高約4m以下の深さに存在すると考えられる。

(5) 包含層の遺物

1～5はI層から出土した遺物である。1は土師器甕底部で推定底径7.6cm、底面の厚さは9.5mmで、内面にハケメ調整、底面には木葉痕が見られる。2、3は鉄製の角釘である。2は平頭釘でJ字状に湾曲しており長さは約9cm、重さは9.9g、断面形は長方形を成す。太さは頭部付近で4.5×6mm、先端部付近では3.5×4.5mmで、頭部は折り曲げて作られており、厚さは5mmで9mmの方形に仕上げられている。先端部の形状は錆により不明である。3はL字状に曲がっており、頭部と先端の一部が欠損している。長さ4.7cm、重さ2.5g、断面形はほぼ方形で太さは5～3mmである。

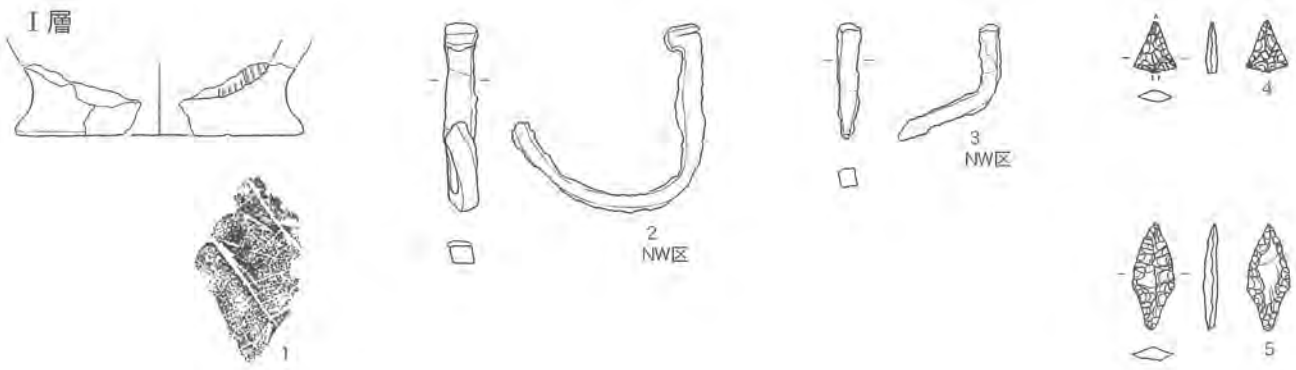
4は小型の有茎石鏃で基部と先端の一部が欠損している。現存長13mm、幅11.0mm、厚さ2.6mm、重さは0.3gで石質は頁岩である。5は有茎石鏃で、長さ28.2mm、茎部長10.6mm、幅11.4mm、厚さ3.3mm、重さは0.9g、頁岩製で背面に一次剝離面を大きく残す。(Photo.12)

6～8はII層から出土した遺物である。6は鉄製平頭釘の完形品で、長さ85.3mm、断面形は4～5mmのほぼ方形を成し、重さは9.6gである。頭部は8×10mmの長方形で、厚さ5mmに折り曲げられている。7は摺鉢口縁部で縁帯部の幅20mm、厚さ14mm、体部厚は6mmあり、内面の櫛目間隔は2mm前後で全体ににぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈する。

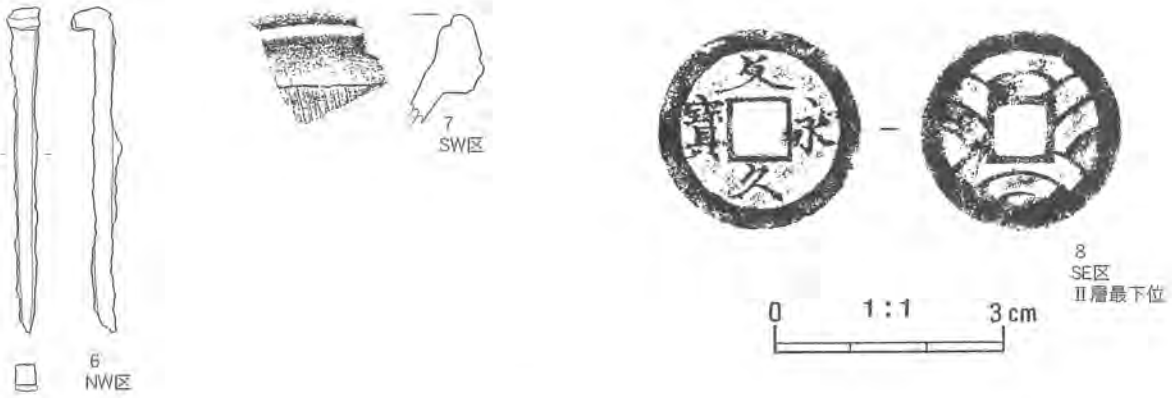
8はII層最下位から出土した文久永寶の銅銭で、外径26.9mm(八分九厘)、重さ2.7g(七分二厘)、外輪幅2.50～2.95mm、外輪厚1.10～0.95mm、内郭幅0.40～0.80mm、内郭厚1.10～1.35mm、孔は6.80×6.85mmの方穿である。銭文書体は草文で松平慶永の筆に類似し、背は十一波の青海波で、一部に鋳抜けが見られる。文久永寶は文久三年(1863)から慶応三年(1867)までの間に鑄造された銅銭で、規定の法量は外径が八分七厘から八分八厘(26.36～26.66mm)、量目は九分から一匁(3.375～3.75g)とされている。これに比べ出土した文久永寶は外径が僅かに大きく、量目は2～3割少ないものとなっている。量目が少なく一部に鋳抜けが見られることから、基本銭より肉薄になっているものと考えられ、模鑄銭の可能性もあるが、銭文は比較的鮮明であり鋳縮みなど鋳写しの特徴も明瞭ではなく、いずれとも判断できなかった。

9～25はIII層から出土した遺物で、11、12、18、21はIII層下半、その他はIII層上半の遺物である。9は摺鉢の底部破片で、器厚は最大7.1mm、内面は滑らかでかなり摩滅しており最も薄い部分では3.5mmとなっている。同心円状の櫛目が施されておりその間隔は2.5mm前後で、摩耗が著しい周縁部では櫛目が消えている。底面には糸切痕が見られ、器面は薄く施釉されておりにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。胎土はやや粗く摩面に孔隙が観察され、色調は浅黄橙色(10YR8/3)である。10は摺鉢の体部下半破片で、器厚は16～13.5mm、放射状の櫛目がやや交差して施されており、顕著な摩滅は見られない。櫛目間隔は2.3mm前後で、6条以上の単位で施されている。胎土及びその色調は9の摺鉢と類似しており、器面には褐色ないし明褐色(7.5YR4/6～5/6)の施釉が見られる。

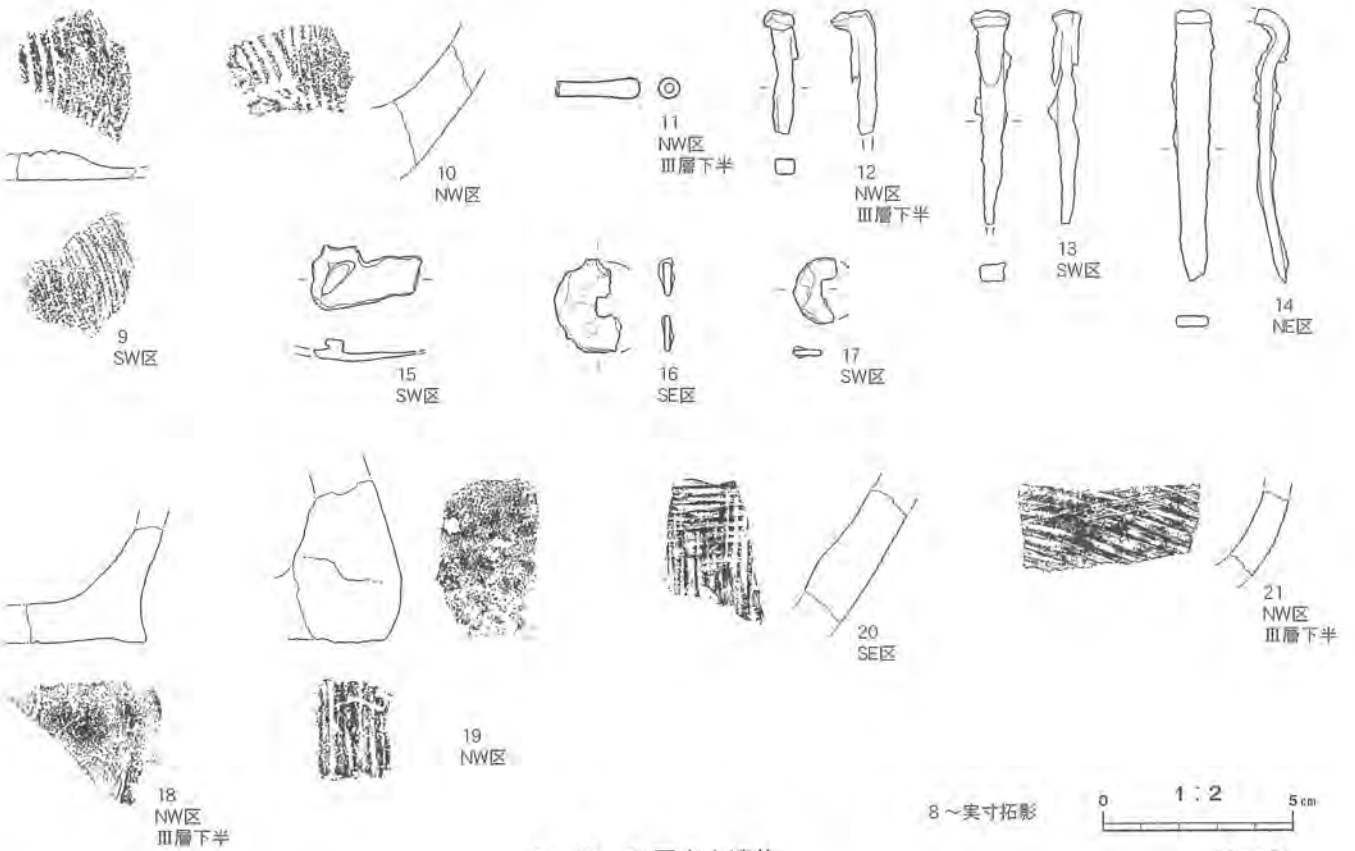
11は銅製のキセルの吸い口で、長さ22.1mm、太さはラオ側端部が4.2mm、そこからやや括れて3.9mmと細くなり、吸い口側では丸みを帯びて5.6～5.4mmと最も太くなって、端部は袋状に窄まり径2.3mmの孔に至る。肉厚は約0.7mm、重さは0.8gである。12～14は鉄製の平頭釘で頭部は折り曲げて作り出されている。12は先端部が欠損しており、現存長32.4mm、重さ4.5g、断面形は4～5mmのほぼ方形で、頭部は10.4×8.5mmの長方形となっている。13は先端部の一部が欠損しており、現存長は56.6mm、重さ5.3g、断面形は身部中央で4.6×6.5mmの長方形で、頭部は10.5×7.2mmである。14は長さ71.4mm、重さ9.9gで、頭部は湾曲しており端部が欠損している。身部は厚さ3mm前後の板状で、幅は9.5～7.2mm、先端の一部は欠損しているが、やや厚みを減じ先鋭化している。15は器種不明であるが、緑青が



II層

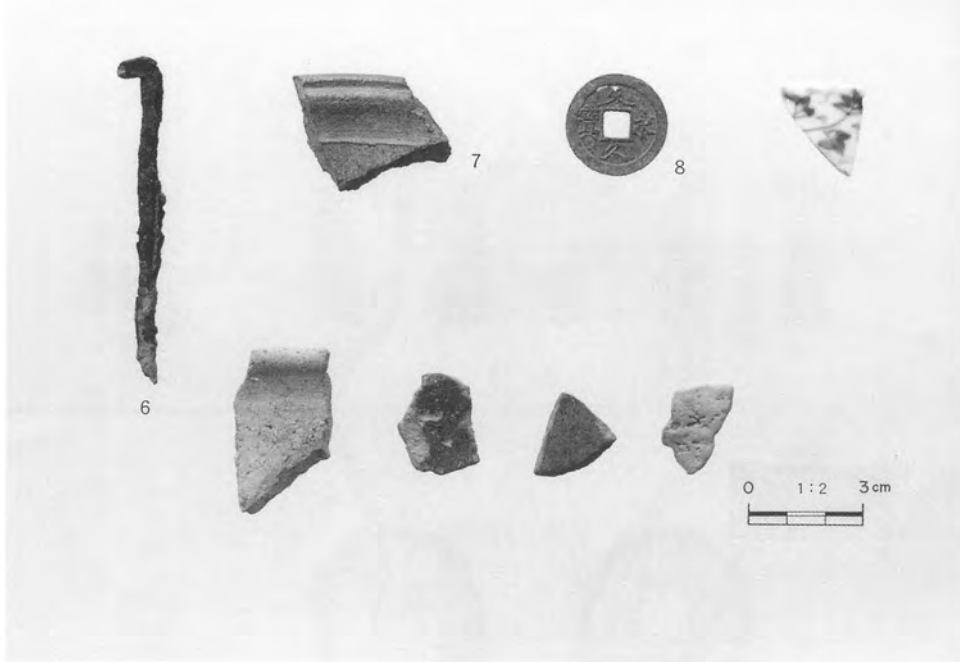


III層

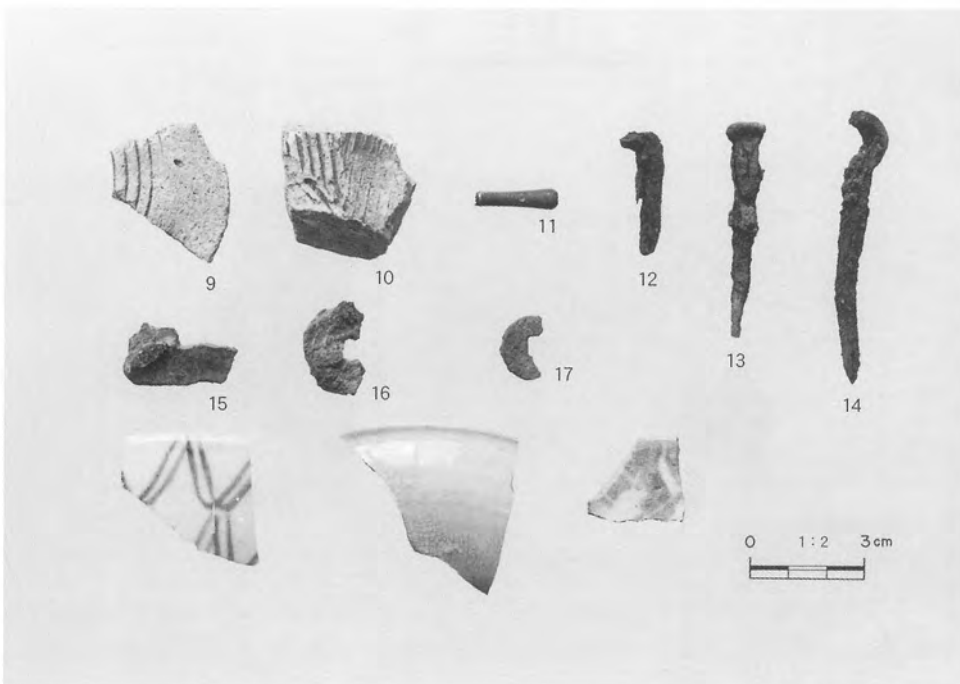


I、II、III層出土遺物

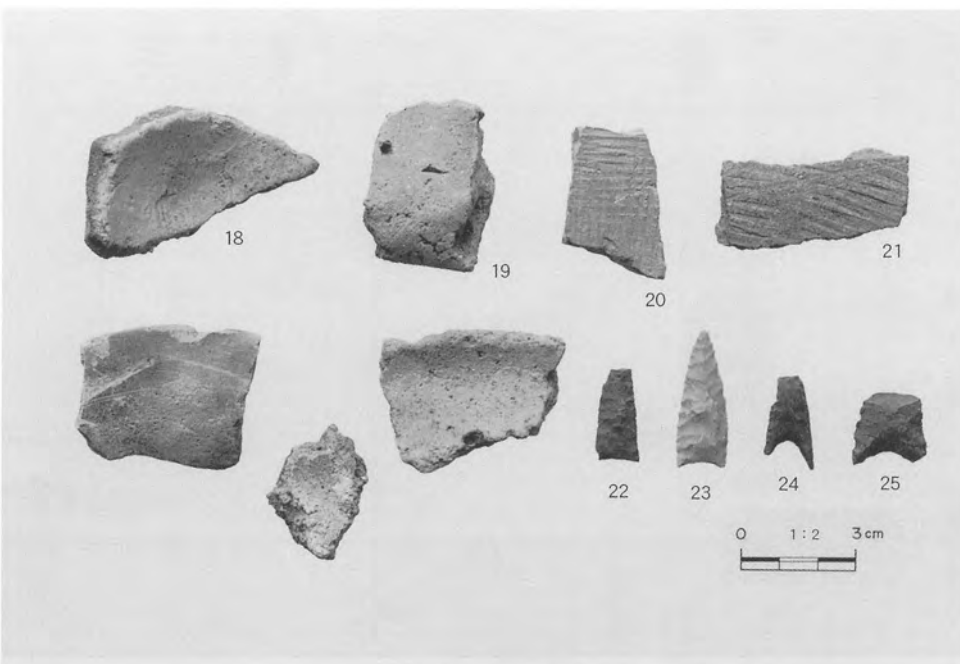
Fig.10



II層出土遺物
photo.29

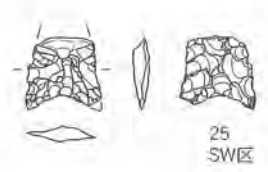
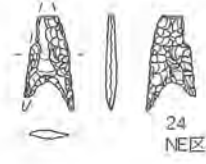
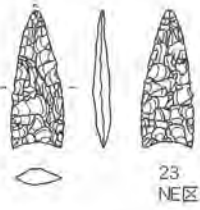


III層出土遺物
photo.30

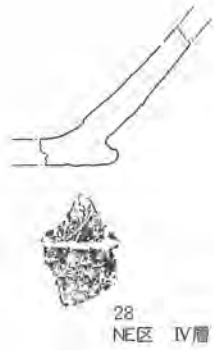
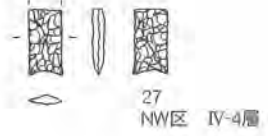
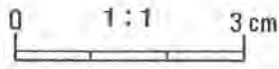


III層出土遺物
photo.28

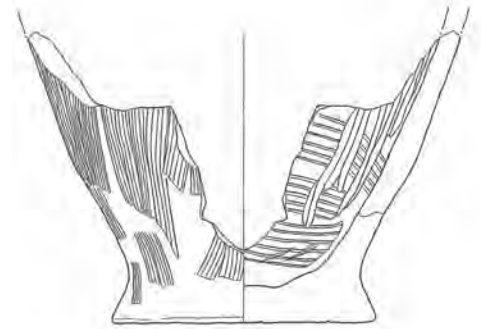
III層



IV層

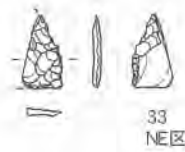
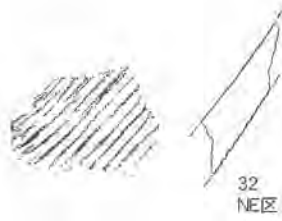


29 NW区 IV-17層



30 NW区 IV-4層

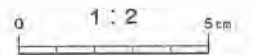
V層



VIIa層

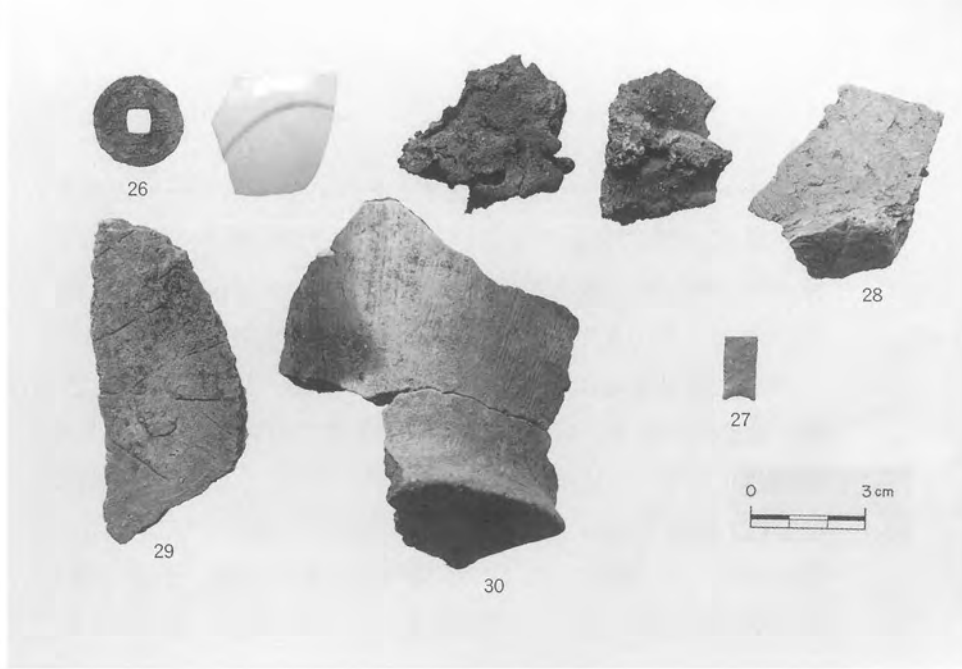


26~実寸拓影

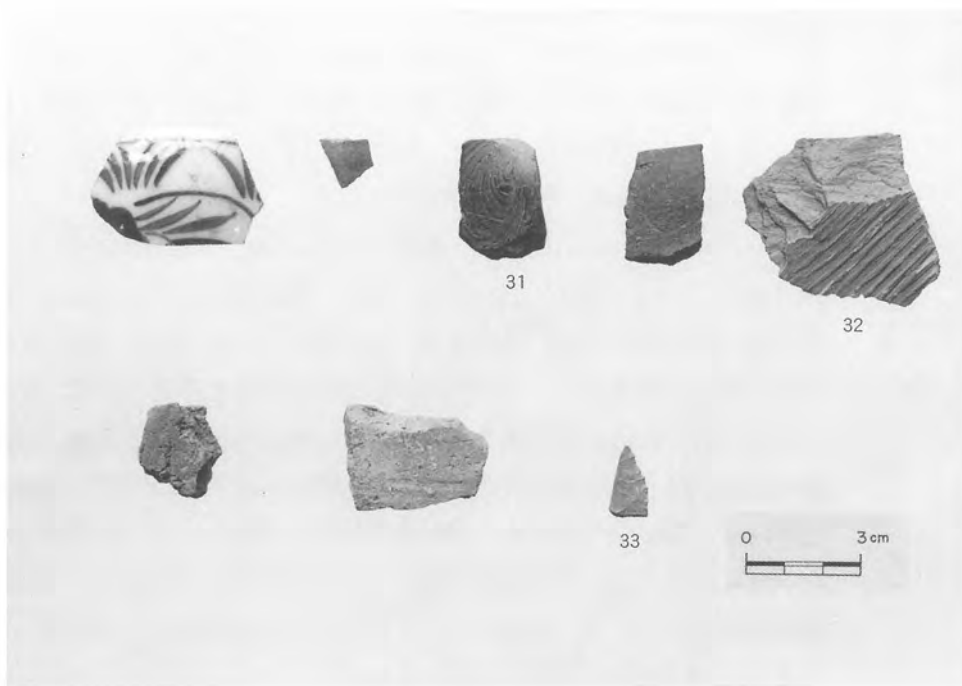


III、IV、V、VIIa層出土遺物

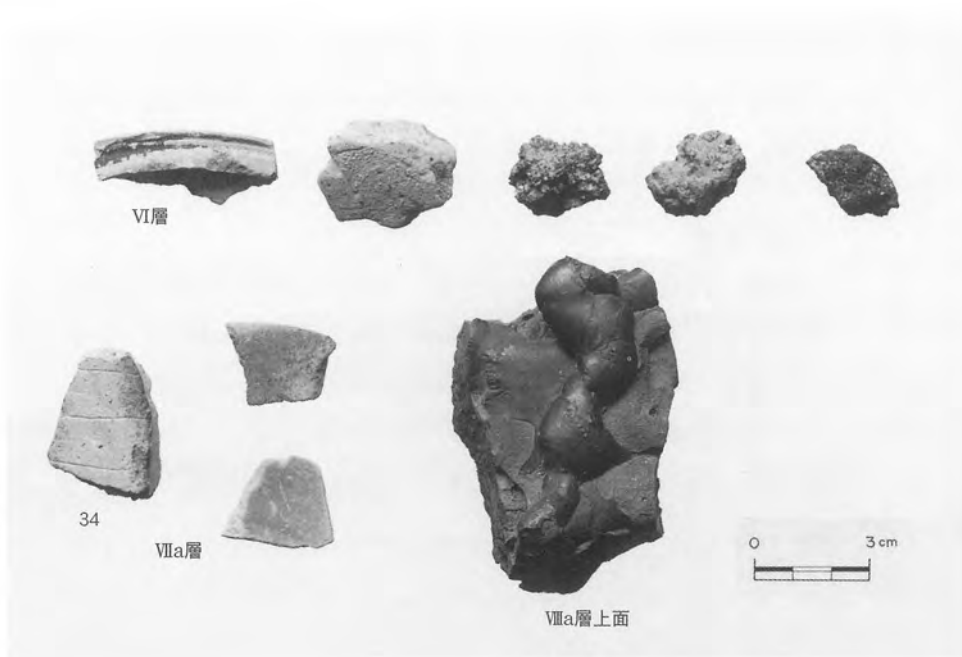
Fig.11



IV層出土遺物
photo.32



V層出土遺物
photo.27



VI、VIIa層、VIIIa層出土遺物
photo.34

見られ、やや湾曲した板状を成すことから銅製品の一部と考えられる。重さ5.1g、厚さは3.5～0.5mmで、片面に高さ約3mmの突起がある。16、17は鉄銭の欠損品でいずれも銭文は不明である。16は外径23mm(七分六厘)、重さ2.2g、厚さ約2mm、孔は5.2mmほどの方穿である。17は外径17mm(五分六厘)、重さ0.8g、厚さ約1.9mm、孔は4.2mmほどの方穿とみられる。

18は土師器甕底部破片で、推定底径5.9cm、体部厚9mm、底面の厚さは11～14mm、内面にハケメ調整が施されており、底面はやや揚げ底状で木葉痕が微かに見られる。19は器種不明であるが、器厚は20mm以上と厚く、成形・調整も通常の土師器とは異なる。底面と考えられる部分には板目状の痕跡が見られ、断面では粘土の積み上げの痕跡が観察される。外面はにぶい橙色、内面及び胎土は灰黄褐色を呈する。この他にも厚手で赤褐色を呈する同様の土器が出土しているが、いずれも細片で器種、用途は不明である。20、21は須恵器で、いずれも外面に叩き目が見られ褐灰色を呈する。20は器厚11～13mmで格子状に叩き目が施されている。21は器厚8mm前後で平行する叩き目が見られる。

22～25は石鏃で、石質はいずれも頁岩である。22は平基の石鏃で、尖頭部及び基部端が欠損している。現存長24.3mm、幅11.7mm、厚さ3.1mm、重さは0.9gである。23はほぼ完形の凹基石鏃で、尖頭部の一部が欠損している。現存長36.2mm、幅14.0mm、厚さ4.8mm、重さは2.1gである。24は尖頭部及び基部の一端が欠損した凹基石鏃で、現存長25.2mm、幅13.2mm、厚さ2.8mm、基部挟入7.5mm、重さは0.8gである。25は凹基石鏃で、尖頭部が大きく欠損しており、現存長は18.7mm、幅19.8mm、厚さ4.2mm、基部挟入3.8mm、重さは1.6gである。

26～30はIV層から出土した遺物である。26はIV-2層から出土した銅銭の寛永通寶で、外径24.2～24.4mm(約八分)、重さ2.3g(六分一厘)、外輪幅2.60～2.85mm、外輪厚1.05～1.10mm、内郭幅0.60～0.80mm、内郭厚1.05mm、孔は6.15×6.25mmの方穿である。銭文はマ頭通、放足寶で潤縁小字、背文は無い。銭文の特徴から、18世紀前半の新寛永銭と考えられる。27はIV-4層から出土した石鏃基部で、石質は頁岩で側縁が平行する。現存長17.3mm、幅8.5mm、厚さ3.2mm、重さは0.6gである。28はIV層上位から出土した土師器甕底部破片で、体部厚5.2～7.7mm、底部厚7.0mm、器面調整は内外面共にヘラナデで、底面には木葉痕が見られる。29はIV-17層から出土した土師器甕底面破片で、厚さは9.4～11.2mm、木葉痕が見られる。30はIV-4層から出土した土師器甕底部破片で、体部厚5.0～9.0mm、底部厚10.0mm、器面調整は外面がハケメ、内面はハケメの後にヘラミガキされており、底面には木葉痕が見られる。

31～33はV層から出土した遺物である。31は土師器内黒坏底部破片で、厚さ2.7～6.5mm、推定底径は55mm前後、底面に回転糸切痕が見られ、内面は剝落している部分が多い。32は須恵器体部破片で、褐灰色(2.5Y6/1)を呈し、器厚は10.0～10.6mm、平行する叩き目が見られる。33は剝片石器の破片で、現存長19.5mm、10.2mm、厚さ2.2mm、重さは0.5g、切削器の一部と考えられる。

34はVIIa層から出土した土師器甕底部破片で、底部厚11mm前後、推定底径は約84mm、内面は剝落が著しく、底面には木葉痕が見られる。

(6) 畝跡 (2P Photo. 6)

NW、NE区の南半からSW、SE区にかけて検出され、その広がりには調査区内で11×8m程の範囲となっており、調査区の北側を除く周囲にも続いている。畝跡はIII層上面に形成され、II層によって覆土されている。畝跡の方向は西南西から東北東(N-64°-E)に伸び、調査区の長辺に直行している。これはほぼ現況地形の傾斜方向に向いており、東上段の現在の畑の畝と同一方向である。畝跡の形状は、畝高15～20cm、畝幅30～40cm、畝の間隔35～40cm、畝底中心の間隔が70～80cmで、調査

区内では16条が確認されている。また畝筋の傾斜は、土層断面図での計測では西南西に5°弱となっている。

検出された畝跡は、極めて良好にその形状が保たれていた。周囲の畑は秋に収穫を終え、調査時点では半年ほど経過したものであったが、この畑に比べても畝が明瞭に残されており、畝高の保持状況は非常に良い。作物によって畝の形状は異なると思われるが、この良好な保存状態は廃棄された後の畑の状況とは考え難く、耕作中あるいはその直後の畝の状況を示しているものとみられる。

明黄褐色砂土を主体とするⅡ層はこの畝の上に堆積したもので、調査区南半部ではこれを完全に埋没させており、調査区周囲にも広がっているとみられ、この層の堆積土量は少なからぬ量と考えられる。土層の観察では、混入土の割合は少なく粉粒状構造であることなどから、短期間に一括堆積した土層と考えられる。

畝跡を構成するⅢ層の最上位からガラス片が出土しているが、これはⅡ層の堆積が断続的となるNW区からの出土であり、Ⅰ層からの混入の可能性も考えられる。

(7) 土坑

NE区の北半部で形状を異にする3基の土坑を精査した。これらの土坑は標高7.2m前後のⅣ層中で検出されたもので、黄褐色土を粒塊状に含むⅣ層中で明瞭に平面形が識別されたため、内容確認のため精査することとした。

・第1号土坑(XK01)

NE区の西端に検出されたもので、全体形状は確認していないが方形ないしは長方形の土坑とみられ、検出面での規模は南北60cm、東西40cmである。土層断面の観察ではこの土坑はⅢ層、Ⅳ層を掘り込んでおり、開口部南北96cmで、深さは50cmとなっている。壁の状態は不規則な凹凸を成して摺鉢状に掘り込まれ、下位でやや屈曲して狭小な底面に至る。

埋土は二層に細分され、いずれも軟質である。上位のA1層は黒褐色砂壤土に黄褐色砂壤土等を混ざる土層で埋土の主体を占める。A2層は底面に厚さ10cmほど堆積している土層で、黒褐色砂壤土に暗褐色砂壤土を混ざるものである。遺物は土師器、角釘、鉄滓が少量出土している。

この土坑から南側では、Ⅱ層の明黄褐色砂土の堆積がⅢ層上面の凹部に断続的に存在する。しかしA1層に黄褐色砂壤土の少量の混入は認められるものの、土坑埋土にはⅡ層の堆積は見られず、この層で覆土されるⅢ層上面の凹部や旧耕作面の畝跡とは時期を異にするものと考えられる。また掘込面もⅢ層上面、あるいはこれより上位の可能性が考えられる。

・第2号土坑(XK02)

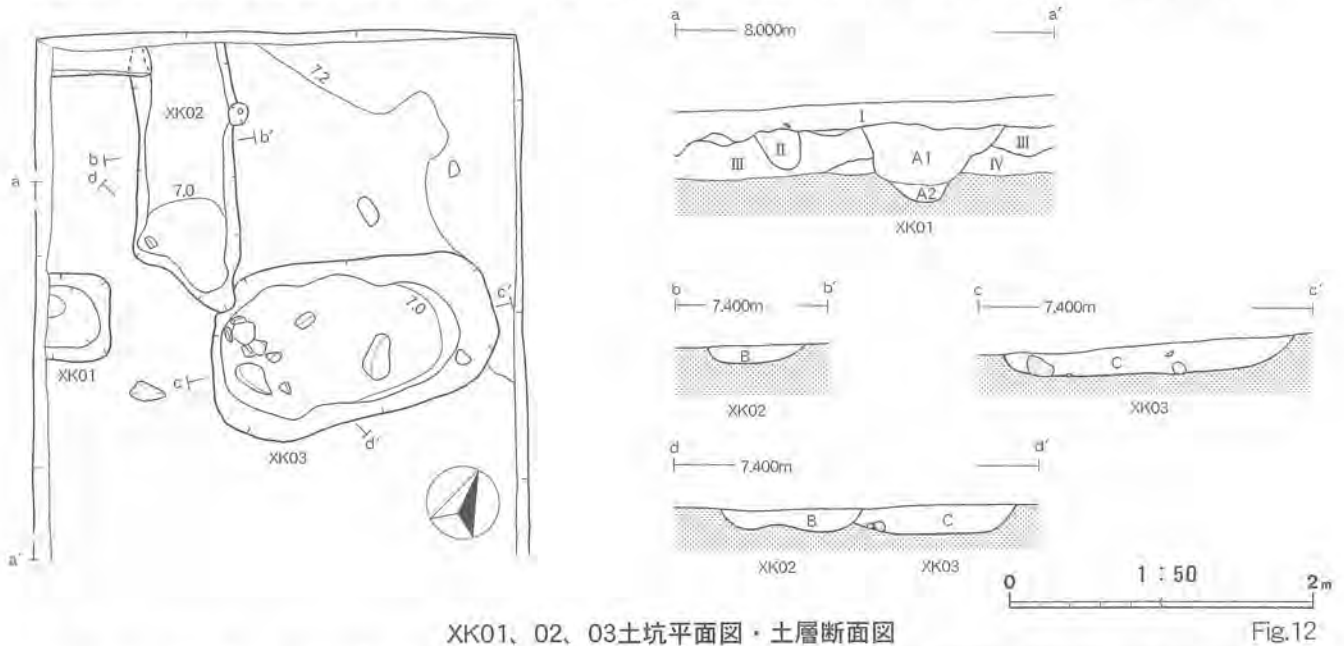
南北方向に長軸をもつ溝状の土坑で、北端部は調査区外で確認されていない。検出面での規模は長さ1.7m、幅70cm、深さ8～20cmで、端部は南東に突出し一部でXK03と重複している。

埋土は黒褐色砂壤土を基本土とし、暗褐色砂壤土等が混入する軟質土で、土師器、羽口の小片を含んでいる。NE区北端の土層断面では、この土坑はⅣ-20層を掘り込みⅣ-19層が埋土を覆っている状態が観察されることから、土坑の形成時期はこれらの土層の堆積間と考えられる。

・第3号土坑(XK03)

東西方向を長軸とする隅丸長方形の土坑で、長さ1.92m、幅は西方でやや広く1.14～0.94m、深さは20cm程である。底面には拳大から人頭大の花崗岩亜角礫が見られ、特に西端部に集中する。埋土中からは、土師器甕口縁部、内黒坏破片、鉄滓の他、2～5cm程の円礫、亜角礫が10点出土している。

埋土はXK02とほぼ同様で軟質であるが、暗褐色砂壤土の混入がやや少なく、これによって各々の埋土が識別された。土坑の重複部分の断面ではXK03の埋土がXK02により切られており、XK03はXK02に先行する遺構と考えられる。また検出状況からは、黄褐色砂壤土等を粒塊状に混入するIV-20層とみられる土層を掘り込んでおり、土坑の形成はXD02と同様にこの層の堆積後と考えられる。



XK01、02、03土坑平面図・土層断面図

Fig.12

層名	基本土	混入土	硬さ・構造・混入物	
XK01土坑埋土	A1	10YR2/3 黒褐色砂壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土2%粉状 10YR2/2 黒褐色砂壤土1%粉状	軟質 粉粒状構造 土師器、鉄滓
	A2	10YR2/2 黒褐色壤土	10YR3/3 暗褐色砂壤土2%粉状	軟質 粉状構造
XK02土坑埋土	B	10YR2/3 黒褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色砂壤土5%粉状 10YR5/6 黄褐色壤土1%粉状	軟質 粉状構造 土師器、羽口
XK03土坑埋土	C	10YR2/3 黒褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色砂壤土3%粉状 10YR5/6 黄褐色壤土1%粉状	軟質 粉状構造 土師器、鉄滓、円礫

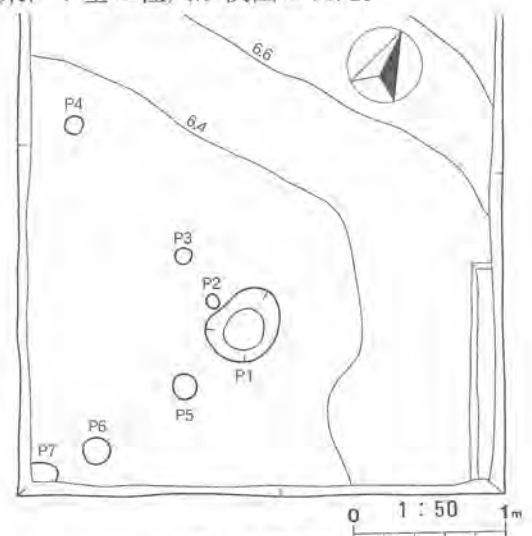
XK01、02、03土坑土層観察表

(8) 柱穴

SE区の南西部ではIV-1、IV-2層上面に対応する層位で柱穴が検出された。ここではⅢ層上半を除去した段階で、SE区の南半部に土色の微妙な変化が見られたことから、この部分を掘り下げたところやや硬く締まった面に至り、この面で遺構確認を行った結果、7基の柱穴が検出された。

柱穴は直径8～18cmの小型のものが5基、楕円形で軸長30～50cm、深さ24cmの大型のものが1基(P1)、またSE区南西隅で一部検出された直径20cm以上のものが1基(P7)である。大型楕円形の柱穴については底面を確認したが、その他は平面形状と検出面での柱痕の有無の把握のみ行い精査には至っていない。

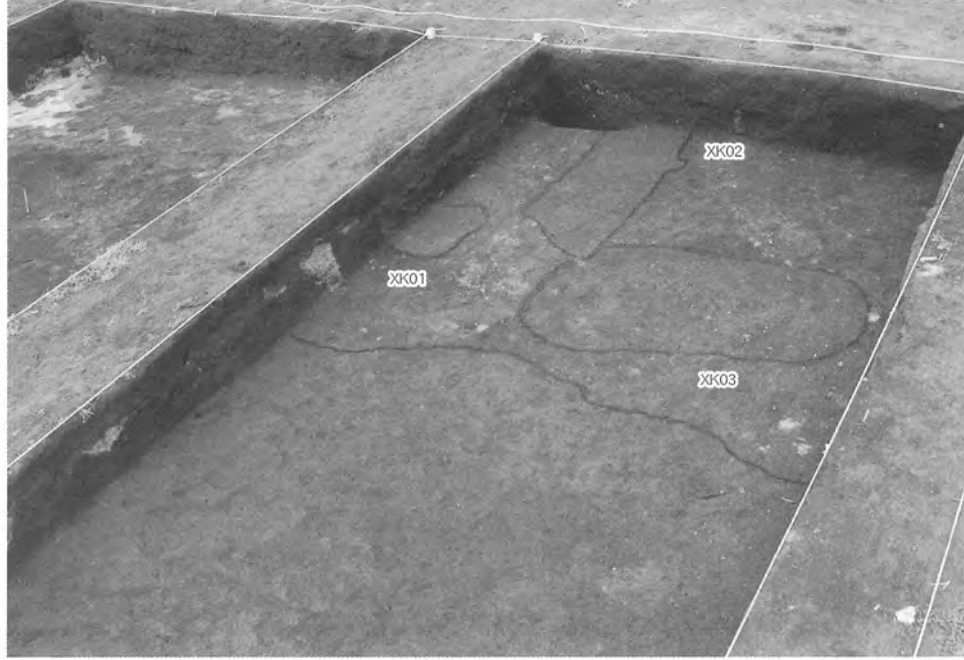
柱穴の配置は、大型楕円形の柱穴を隅柱として西北西に3基(P2～P4)、南々西に3基(P5～P7)の柱穴が柱筋を直行して並んでいる。南々西方向の柱筋は磁北から26°東に偏しており、いずれの柱穴にも柱痕は見らなかった。柱穴の検出面は標高6.2～6.3mで、西北西方面の柱筋はほぼ水平、



SE区柱穴平面図

Fig.13

第1～3号土坑検出状況
(南東→)
photo.35



第1～3号土坑埋土断面
(南東→)
photo.36



第1～3号土坑完掘状況
(南東→)
photo.37



南々西方向の柱筋は約4°傾斜している。各柱穴の中心間の距離は、西北西方向の柱筋で31cm(P1-P2)(1尺)、36cm(P2-P3)(1.2尺)、113cm(P3-P4)(3.8尺)、両端の柱間(P1-P4)は180cm(6尺)となっている。また南々西方向の柱筋では一部のみ検出された柱穴については中心位置が不明であり、これを除く3基の柱穴では柱間は52cm(P1-P5)(1.7尺)、72cm(P5-P6)(2.4尺)である。

IV-1、IV-2層は柱穴形成時の生活面を構成する土層と考えられるが、これらの土層は西方のSW区のトレンチ部分にも堆積が広がっており、土層断面ではトレンチ南端から4.5mの範囲で確認されている。また、この層の上面には掘り込み状の凹部や木根状の入り込みが土層断面に見られ、これらが生活面での人為的な痕跡を示す可能性もある。生活面を構成するIV-1、IV-2層の堆積範囲と土層断面の状況などから、柱穴の分布は西方に広がりをもつものと考えられるが、柱穴の分布範囲をこれらの土層の堆積範囲内に限定して考えた場合、西北西方向の柱筋の延長は隅柱から4.3mを越えないものとなる。

4 まとめ

(1) 遺物包含層

・出土遺物と層位関係

この調査で出土した各層の遺物を概括すると下表のとおりとなる。ただし、Ⅲ層下半より下位の包含層の調査は、トレンチないしテストピットによる部分的なものであり、包含遺物の総体を把握したのではなく、以下の記述もⅢ層下半からⅧ層については調査区の中でも限定された範囲から出土した遺物であることを前提としたものである。

主な出土遺物としては、銭貨、陶磁器、鉄製品、鉄滓、土師器、須恵器、剥片石器があり、縄文時代から近現代に至る各種遺物が見られた。

このうち鉄滓については全ての土層から出土しており量的にも多く、最も下位のものは地表面下1.9mのⅧ層上面から出土している。また釘類を主体とする鉄製品もⅦ層及びⅤ層から上位の各層に見られ、鉄滓や鉄製品の包含状況は、近隣に鉄生産に関わる遺跡が所在する可能性が高いことを示している。鉄滓等の生成時期の確定は困難であるが、土師器や須恵器が伴って出土している点から、この中には古代に属するものも含まれていると考えられる。

包含層出土遺物の種別一覧表

Tab.1

層位	出 土 遺 物						
	銭 貨	陶 磁 器	鉄 製 品	鉄 滓	土 師 器	須 恵 器	剥 片 石 器
I層	—	○	○	○	○	—	○
II層	○(註1)	○	○	○	○	—	—
III層	○(註2)	○	○	○	○	○	○
IV層	○(註3)	○	○	○	○	—	○
V層	—	○(註4)	○	○	○	○	○
VI層	—	—	—	○	○	○	—
VII層	—	—	○	○	○	—	—
VIII層	—	—	—	○(註5)	—	—	—

註1～文久永寶

註2～無紋鉄銭

註3～寛永通寶(IV-2層)

註4～染付磁器、鉄釉陶器

註5～Ⅷ層上面

土師器はⅦ層から上位の各層に見られその出土量も多い。須恵器についてもⅢ層、Ⅴ層及びⅥ層から少量ながら出土しており、調査区周辺に古代の遺構が存在するものと考えられる。

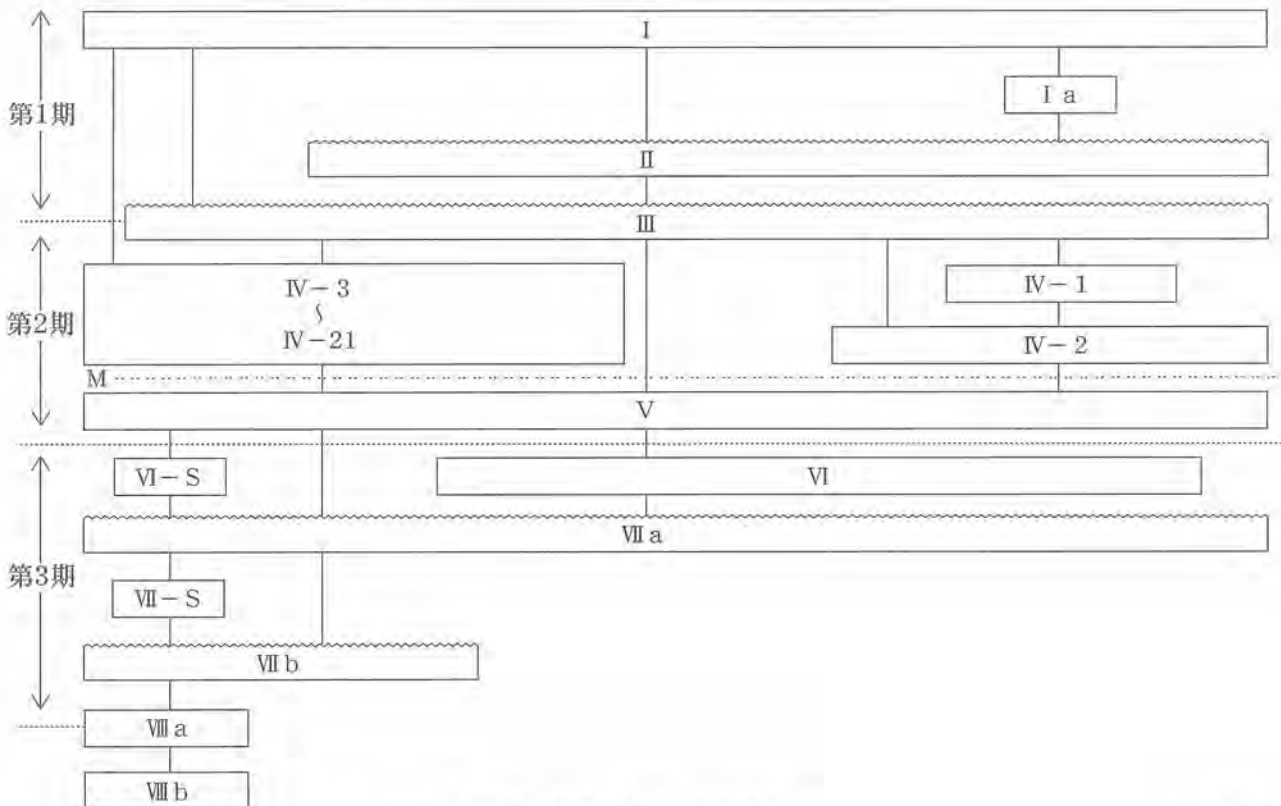
陶磁器についてはⅥ層以下では出土しておらず、最も下層に見られる陶磁器はⅤ層下半出土の染付磁器、鉄釉陶器で、これらを含め表土からⅤ層までの陶磁器は近世以降に属するものとみられる。

銭貨はⅡ層から文久永寶、Ⅲ層から無紋鉄錢、Ⅳ層からは寛永通寶が出土しており、これらは18世紀前半以降の年代を示すものである。その他には石鏃などの剥片石器がⅤ層まで混在しているが、縄文時代の土器については出土しなかった。

次に、調査区内で観察された各層の層位関係について以下の図に示す。図の上下関係は層の堆積序列を表し、縦線は各層の接触状況を示している。層位関係図-1は包含層全体の関係を表したもので、このうち小単位層で構成されているⅣ-3～Ⅳ-21層については、土層断面と平面検出状況を併せて検討し、別途層位関係図-2に示した。

この調査で確認された包含層は、現表土を含め8層に大別され層厚2mを越すものである。土層堆積前の基盤層については確認できなかったが、テストピット部分の検土杖探査では標高約4mまではⅧ層と同様な土層となっており、この地点では地表から3.5mを越える深さの堆積層が形成されていると考えられる。各土層の観察結果から堆積過程をたどると次のようになる。

Ⅷ層は黒褐色の砂壤土で、その層相から自然堆積層と考えられる。これを覆ってⅦ層が堆積していくが、その上半部のⅦa層は層状構造を呈し、砂土の葉理状の堆積が観察されている。またⅦb層上面の凹部には部分的に砂土純層のⅦ-S層が見られることから、Ⅶ層上半部では一時的な含水土砂の流入が複数回あったことを示しており、これが主な堆積要因と考えられる。またⅦa層、Ⅶb層の上面はいずれにも凹凸が見られ、特にⅦa層上面では南北断面で規則的な凹凸が観察されており、人為的な関与があった可能性が考えられる。



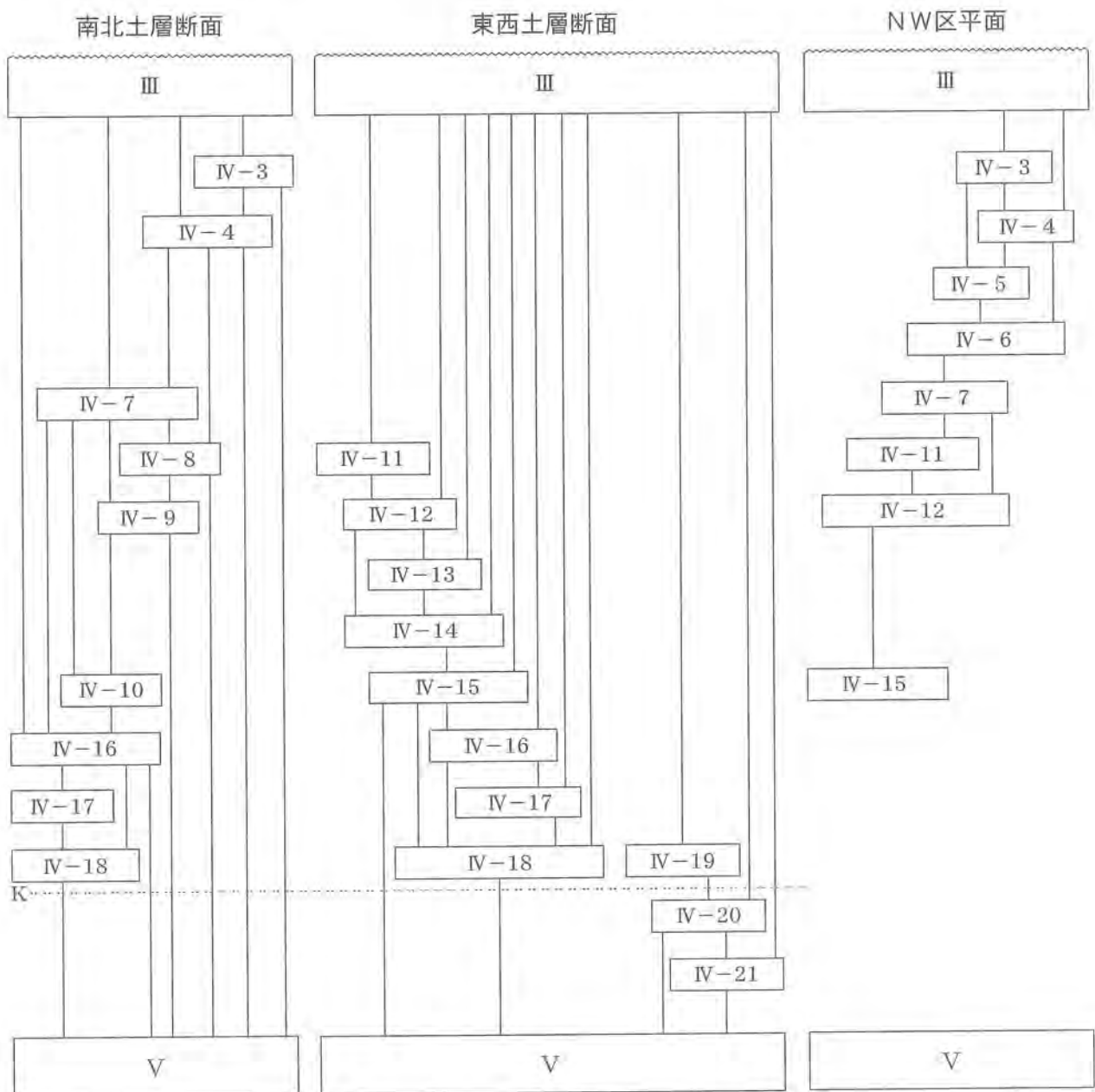
層位関係図-1 (遺物包含層)

Fig.14

VI層は褐色砂土を多く含む土層で、比較的薄層で堆積範囲は調査区全面に至っておらず、VII層を覆土していない部分が見られる。土層構造は層状ないし葉理状で、一部に砂鉄の自然堆積もあり、含水土砂の流入による自然堆積層と考えられる。東西断面に観察された褐色砂土純層のVI-S層も同様な成因によりVII a層上面に堆積しており、VI層堆積当初から土砂の流入を受けていたとみられる。VI層上面はほぼ平坦で、これを覆ってV層が堆積する。この層もVI層同様、雨水による土砂流入を示す土層構造が見られ、VII層上半からV層に至る堆積は、雨水性流入土砂の累積が主な成因と考えられる。

V層までは自然営為による堆積土層であるが、この層の上面、層位関係図-1のM面に至り、人為的な関与があったことを示すIV層の形成が行われる。調査区南半部に見られるIV-1、IV-2層は硬質層で、この上面から何らかの構造物の痕跡である柱穴が検出されている。また、この層の堆積により旧地形の傾斜がやや緩和されていることから、人為的な土砂搬入により生活面を構成した土層と考えられる。

IV-3からIV-21層の各層は堆積範囲・土量共に小単位であり、層理面は低位方向の南西に傾斜してい



層位関係図-2 (IV-3~IV-21層)

Fig.15

る。これらの土層によって、従前地形から最大で70cmの地表の変位が見られ、人為的な土砂搬入により盛土が行われたものと考えられる。盛土の目的を示唆する痕跡は見いだせなかったが、これらの土層は全体に軟質であり、盛土上面に生活痕跡を示すような硬質面や遺物の出土状況は認められず、IV-1、IV-2層とは性格を異にするものと考えられる。

IV-3からIV-21層の堆積経過をたどると次のようになる。まず、V層上に調査区北東部でIV-21層、IV-20層が形成され、以後IV-3層までの盛土が搬入されて行くのであるが、IV-20層の堆積時点のK面(層位関係図-2)では、2基の土坑XK02、XK03の掘り込みという人為的関与が成されている。これらの土坑には時期差が認められ、XK03の埋没後にXK02が掘り込まれており、XK02の埋没後にIV-19層がこれを覆土している。K面では二基の土坑の掘り込み・埋没という経過が存在し、IV-20層とIV-19層との堆積間には時間的な断続が認められる。

XK02の埋没後は、IV-19層からIV-3層まで連続的かつ短時間に盛土が行われたと考えられる。東西断面で観察されたIV-19からIV-11層の堆積状況は、黄褐色土と暗褐色土が小単位の互層を成しており、各土層の上面は 18° ～ 38° で西に傾斜し、西方ほど傾斜角が急になっている。IV-19層とIV-18層は土層観察ベルトを隔てて確認されたものであるが、層相が類似しておりベルト間での層理面の想定からも、これらが同一層である可能性が考えられる。南北断面では、IV-18～IV-16層の上位にIV-10層～IV-7層及びIV-4、IV-3層が堆積し、一部で黄褐色土と暗褐色土が小単位の互層を成しており、IV-4までの土層上面は南に 15° ～ 30° ほど傾斜している。

南北、東西の各断面で記録されたIV-10層とIV-15層、IV-9層とIV-12層、IV-8層とIV-11層とは同一層序に位置すると考えられ、土層内容の比較からはIV-10層とIV-15層が同一層である可能性が高い。土層断面の状況とNW区で確認された各土層の平面的な広がりからは、北東方向から南西方向へ弧状あるいは帯状に土砂が搬入され、盛土が行われたとみられる。

IV-1、IV-2層とIV-3～IV-21層との関係については、堆積範囲が重なっておらず直接的な前後関係は不明である。南北土層断面の観察では両層群で構成される上面の標高差は85cmほどあり、Ⅲ層堆積前の状況を南北方向にたどると、北側の盛土部分からIV-3層上面が緩やかに南に傾斜し、ほぼ水平なV層露出部分を介してIV-1、IV-2層の堆積部分に至るものとなり、盛土緩斜面とやや平坦な面で構成される地形となっていたものと考えられる。

このような地形上に暗褐色土のⅢ層が堆積し、調査区内ではこの層によってほぼ全面が覆われていく。Ⅲ層の堆積により北半部IV層の盛土による地形落差は緩和され、Ⅲ層上面の傾斜は西に 5° 、南に 3° ほどの一定傾斜となり、現況地形に近い状態となる。

Ⅲ層にはV層以下に見られるような雨水性の土砂流入の痕跡はなく、粉状構造を成している。これはⅢ層上面の畝跡が示すように耕作による攪乱を受けており、その結果として粉状構造になったと考えられる。また層厚は最大50cmあり、最終的な耕作深度でⅢ層が分層されたと考えられたが、土層観察ではこれを明瞭に識別することはできなかった。この層が全体的に粉状構造で、細分層が見出せなかったのは、徐々に堆積していく間にも耕作が繰り返されていたことを示していると考えられ、その最終的な痕跡が上面の畝として残されたとみられる。Ⅲ層上面で耕作中ないしその直後にⅡ層が短時間に一括堆積し、この畑は埋没する。畝は耕作していた状態を保ったままⅡ層に覆われており、埋没前の畑の状況がそのままに残されている。Ⅱ層は花崗岩が風化した真砂土を主体とする土層で、土壤養分に乏しく耕作土として良質なものとはいえないが、その後も耕作は続けられ表土Ⅰ層の耕作土に至ることとなる。

・遺物包含層の堆積時期

この調査によって確認された各土層の形成状況と出土遺物から包含層の堆積時期を検討した結果、その上限は古代以降であり、その後近世、近代を経て現代に至る堆積経過をもつものと考えられる。

層位関係図-1の三期区分は、調査で得られた各層の出土資料の中で最も新しい時期や年代を示す遺物に基づき区分したもので、堆積時期がそれより以前には溯り得ないことを示している。区分の第3期はⅧa層上面の鉄滓の存在とⅥ層以下に陶磁器を含まないことから、堆積時期は古代以降に限定され、第2期はⅤ層の陶磁器、Ⅵ-2層の寛永通寶により近世以降となる。第1期はⅡ層出土の文久永寶などから近代以降の時期であり、これにはその直前近時のⅢ層上位の耕作期も含まれる。

これらの堆積時期は、あくまでも限定された調査範囲の中で出土した遺物から検討された結果であり、各期に属する層位区分がさらに下位の層を含むこととなる可能性はあり、今後の調査による確認・考察により総体が把握されるものと考えられる。

(2) 畝跡

畝跡の時期については、これを覆っているⅡ層から文久永寶が出土しており、その流通年代からⅡ層の堆積年代は文久三年(1863)以降となる。また、この畑で50年ほど耕作をしてきた地権者からの聞き取りでは、昭和26年以降については、土砂の搬入ないし流入は無く、現況の形状の畑地で耕作していたとのことであり、Ⅱ層の堆積はそれ以前ということになる。これらのことからⅡ層が堆積する直前の遺構である畝跡の終末時期は、概ね近代に位置づけられる。

畝跡の形状については前述のとおりであるが、この畝で栽培されていた作物の種類については、これを推定するに至っておらず、今後、類似遺構の調査所見や耕作事例との形状比較により検討を要する課題となった。

(3) 土坑

土坑の分布はNE区北部に集中しているが、これら三基の土坑は時期を異にするものであり、この分布状況は偶発的な偏在といえる。XK01はこれらの中で最も新しい土坑でⅢ層上面以降に形成されたもので近代以前には溯らない遺構である。XK02、03は重複しているが、いずれもⅣ-20層を掘り込んでおり、これらの土坑の形成はその上面の時点に位置づけられ、近世以降の遺構と考えられる。

XK03の埋没状況については、埋土や底面に礫が見られることから人為的に埋めもどされたことも考えられ、その埋没過程が短時間であった可能性がある。XK02の埋土については、軟質で粉状構造であるが、その堆積が人為か自然かを判断する要素に乏しく埋没時間を想定するに至らなかった。

これらの土坑の形状は各々異なり、方形ないし長方形、溝状、隅丸長方形を呈し、用途も同一ではないと考えられる。土坑の用途については明確に判断し得ないが、XK03に見られる底面の礫や埋土中の円礫の存在、各土坑の形状などはその性格を示唆しているものと考えられる。

(4) 柱穴

柱穴については、その配置の一部を確認したのみで全体の規模・形状は把握しておらず、どのような構造物が存在していたかは不明である。検出された柱穴は直行する柱筋を成しており、この配置から塀などの区画施設の痕跡とも想定されるが、柱間に規格性が乏しく区画内の空間利用という点では問題が残る。つまり施設規模を推定すると、生活面構成土の堆積範囲内に施設が配置されたと考えた

場合、西北西方向の柱筋の延長は隅柱から4.3m以内のものとなり、この規模では区画施設としては範囲が狭小と考えられる。他の建造物の可能性として小規模な建物が想定されるが、検出された柱穴のみではこれと断定し難く、柱穴で構成される施設の種別、性格を特定するには至らなかった。

なお柱穴形成時の生活面を成すIV-2層からは、18世紀前半とみられる新寛永銭が出土しており、この土層の年代はこれを遡ることはなく、柱穴で構成される何らかの建造物の年代も18世紀前半以降に限定される。

(5) 総括と付記

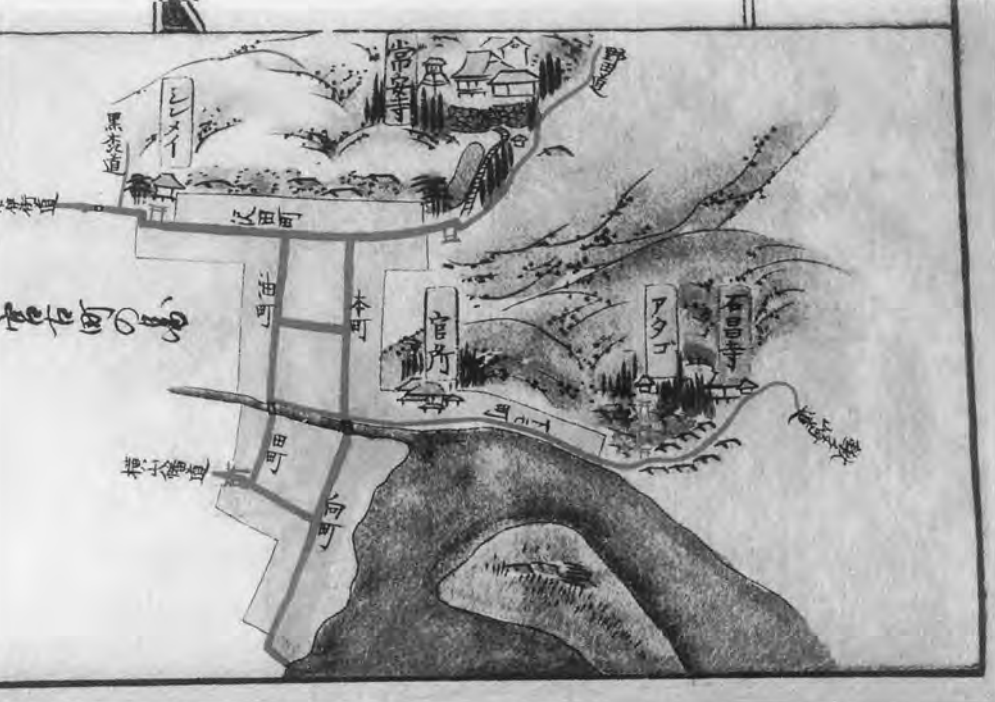
この調査では古代以降に位置づけられる遺物包含層が確認された。出土遺物からは、鉄生産に関する遺跡や古代の遺構が調査区近隣に存在することが推察され、また明確に時期は特定できなかったものの包含層中には近世以降の諸々の人為的な痕跡が見い出された。耕作という自然状況の土地利用のみならず、IV層に見られる盛土や生活面構築土さらに柱穴は、ある目的をもって土地に働きかけた行為があったことを示している。

小沢地区の近世の状況については幕末の絵図(Photo.13,38)に示されているとおり、宮古小学校の南の横町通りが閉伊街道となっており、これから北に分かれて山口の黒森神社に向かう「黒森道」が見られる。分岐点は「神明社」の鳥居の西で、この社は宮古小学校の東に現存している。絵図では黒森道は丘陵裾野を通っているものとみられ、調査区近辺を通過していたことになる。絵図の位置関係など精査を要する点もあるが、周辺の歴史的状況を示すものとして記し、今後の調査の参考とする。

また調査では堆積土層が厚く基盤層の確認はできなかったが、テストピット部分では標高約4mまでは同様の堆積層となっていることが知られた。堆積基底の深度や堆積層の状況などについてはボーリング調査に依らざるを得ないが、この標高値に堆積する土層からは縄文時代の古地形や汀線に関する所見を見いだすことができるものと考えられ、今後の課題として付記する。

〈参考文献〉

- 岩手県企画開発室 1974 『北上山系開発地域土地分類基本調査』
宮古市 1980 『宮古の自然』
宮古市教育委員会 1983 『宮古市遺跡分布調査報告書1』 宮古市埋蔵文化財調査報告書3
宮古市教育委員会 1986 『宮古市遺跡分布図－昭和60年度版－』 宮古市埋蔵文化財調査報告書9
宮古市教育委員会 1989 『狐崎Ⅱ遺跡－昭和63年度発掘調査報告書－』 宮古市埋蔵文化財調査報告書20
宮古市教育委員会 1990 『狐崎遺跡－平成元年度発掘調査報告書－』 宮古市埋蔵文化財調査報告書22
宮古市教育委員会 1992 『黒森町Ⅰ遺跡－平成3年度発掘調査報告書－』 宮古市埋蔵文化財調査報告書32
岩手県教育委員会 1998 『岩手の貝塚－岩手県内重要遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』 岩手県文化財調査報告書第102集
宮古市教育委員会 2002 『山口館跡－北部環状線道路改良工事関係発掘調査報告書－』 宮古市埋蔵文化財調査報告書57
亶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1990 『長根Ⅰ遺跡発掘調査報告書－宅地造成工事関連発掘調査－』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第146集
亶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999 『山口館跡発掘調査報告書－宮古市北部環状線道路改良工事関連発掘調査－』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第310集
奈良県立橿原公苑考古博物館 1973 『大和考古資料目録第2集 館蔵古銭資料』
小川 浩 1983 『日本古貨幣変遷史』 日本古銭研究会



さんへいろていき
『三閉伊路程記』[幕末]
(盛岡市中央公民館所蔵)
photo.38



遺跡周辺垂直写真
(昭和34年撮影)
photo.39

報告書抄録

ふりがな	こざわ2 おおうえいせき							
書名	小沢Ⅱ大上遺跡							
副書名	市内遺跡発掘調査報告書							
巻次	2							
シリーズ名	宮古市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	58							
編著者名	竹下将男							
編集機関	岩手県宮古市教育委員会							
所在地	〒027-8501 岩手県宮古市新川町2番1号 TEL. 0193-62-2111 FAX. 0193-63-9119							
発行年月日	2002年8月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こざわ2 おおうえ 小沢Ⅱ大上	いわてけんみやこし 岩手県宮古市 こざわ1ちょうめ 小沢1丁目 ばんごう 101番2号	03202	LG24-2080	39°38'34"	141°57'12"	19980408 ~19980522	99.2㎡	個人住宅建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
小沢Ⅱ遺跡	遺物分布地	近代・古代 縄文	遺物包含層 畝跡・土坑 柱穴	文久永寶、寛永通寶、陶磁器、鉄製品、 鉄滓、フイゴ羽口、土師器、須恵器、 石鏃				

宮古市埋蔵文化財調査報告書一覧

1 1979 『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』	32 1992 『黒森町Ⅰ遺跡—平成2年度発掘調査報告書—』
2 1980 『宮古市千徳遺跡発掘調査概報』	33 1992 『高根遺跡—平成3年度発掘調査報告書—』
3 1983 『宮古市遺跡分布調査報告書1』	34 1992 『鯉沢遺跡群—平成2年度発掘調査報告書—』
4 1984 『宮古市遺跡分布調査報告書2』	35 1992 『大付遺跡—平成3年度発掘調査報告書—』
5 1984 『赤前遺跡群第1次・第2次発掘調査報告書』	36 1992 『細越Ⅰ遺跡・芋野Ⅱ遺跡 —農林課関係田代地区埋蔵文化財発掘調査報告書—』
6 1985 『宮古市遺跡分布調査報告書3』	37 1992 『崎山遺跡群Ⅵ—平成3年度発掘調査概報—』
7 1985 『金浜館跡発掘調査報告書』	38 1993 『萩沢Ⅱ遺跡—平成4年度発掘調査報告書—』
8 1986 『宮古市遺跡分布調査報告書4』	39 1993 『早稲橋Ⅱ遺跡—第1次・第2次発掘調査報告書—』
9 1986 『宮古市遺跡分布図—昭和60年度版—』	40 1993 『崎山遺跡群Ⅶ—平成4年度発掘調査概報—』
10 1986 『中谷地・島田遺跡調査報告書』	41 1994 『崎山遺跡群Ⅷ—平成5年度発掘調査概報—』
11 1987 『崎山貝塚・トノノ木Ⅳ遺跡調査報告書』	42 1995 『赤前Ⅰ牛子沢遺跡—平成4年度発掘調査報告書—』
12 1987 『寒風・早稲橋Ⅳ遺跡調査報告書』	43 1995 『磯鶴館山遺跡発掘調査報告書』
13 1987 『崎山遺跡群Ⅰ—昭和61年度発掘調査概報—』	44 1995 『崎山貝塚—範囲確認調査報告書—』
14 1988 『青猿Ⅰ・下在家Ⅱ・千徳城遺跡群(堀合館) —昭和62年度発掘調査報告書—』	45 1995 『笹沢Ⅰ・加村・仲組Ⅲ・堺ノ神遺跡 —市道浦の沢線改良工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書—』
15 1988 『崎山遺跡群Ⅱ—昭和62年度発掘調査概報—』	46 1995 『花原市遺跡—平成4年度発掘調査報告書—』
16 1989 『千鶴遺跡—昭和62年度発掘調査報告書—』	47 1995 『宮古市内遺跡発掘調査概報Ⅰ 早稲橋Ⅱ遺跡・崎山貝塚』
17 1989 『トノノ木Ⅰ遺跡—第1～7次発掘調査報告書—』	48 1996 『大付遺跡—平成5年・6年度発掘調査報告書—』
18 1989 『崎山遺跡群Ⅲ—昭和63年度発掘調査概報—』	49 1997 『花原市遺跡—平成8年度発掘調査報告書—』
19 1989 『高根遺跡—昭和63年度発掘調査報告書—』	50 1997 『白石遺跡—第6次発掘調査報告書—』
20 1989 『狐崎Ⅱ遺跡—昭和63年度発掘調査報告書—』	51 1998 『赤畑・天神山・山口館 —北部環状線道路改良工事関係埋蔵文化財調査報告書—』
21 1989 『崎山トノノ木Ⅳ遺跡—昭和63年度調査報告書—』	52 1998 『藤畑遺跡—平成9年度発掘調査報告書—』
22 1990 『狐崎遺跡—平成元年度発掘調査報告書—』	53 1999 『赤前Ⅲ・赤前Ⅳ八枚田・赤前Ⅴ柳沢・赤前Ⅵ釜屋ノ沢・小堀内Ⅲ遺跡 —水産課津軽石環境整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書—』
23 1990 『崎山遺跡群Ⅳ—平成元年度発掘調査概報—』	54 1999 『千鶴Ⅳ遺跡 —水産課千鶴地区漁港漁村総合整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書—』
24 1990 『磯鶴館山遺跡—昭和63年度発掘調査報告書—』	55 1999 『崎山貝塚—第12次・13次内容確認調査概報』
25 1990 『銀ヶ崎館山貝塚—平成元年度発掘調査報告書—』	56 2000 『木戸井内Ⅱ・木戸井内Ⅲ・上村Ⅲ遺跡 —特別高圧送電線ラサ工業宮古支線新設工事関係埋蔵文化財調査報告書—』
26 1991 『崎山遺跡群Ⅴ—平成2年度発掘調査概報—』	57 2002 『山口館跡—北部環状線道路改良工事関係埋蔵文化財調査報告書—』
27 1991 『青猿Ⅰ・千徳城遺跡群—平成元年・2年度発掘調査報告書—』	58 2002 『小沢Ⅱ大上遺跡—市内遺跡発掘調査報告書2—』
28 1990 『熊野町遺跡—昭和63年度発掘調査報告書—』	
29 1991 『弘川Ⅰ遺跡—平成2年度発掘調査報告書—』	
30 1992 『金浜Ⅰ遺跡(昭和58年度)・大付遺跡(平成2年度) 発掘調査報告書』	
31 1992 『重茂館遺跡群—第1次調査報告書—』	

宮古市埋蔵文化財調査報告書 58

こざわ 2 おお うえ
小沢Ⅱ大上遺跡
—市内遺跡発掘調査報告書2—
2002.8

平成14年8月25日発行

発行 岩手県宮古市教育委員会
〒027-8501 宮古市新川町2番1号
TEL.0193-62-2111
印刷 株式会社文化印刷
〒027-0037 宮古市松山5-13-6
TEL.0193-62-4578

